

新
月
民
文
学

山
本
勉
弥

H
S

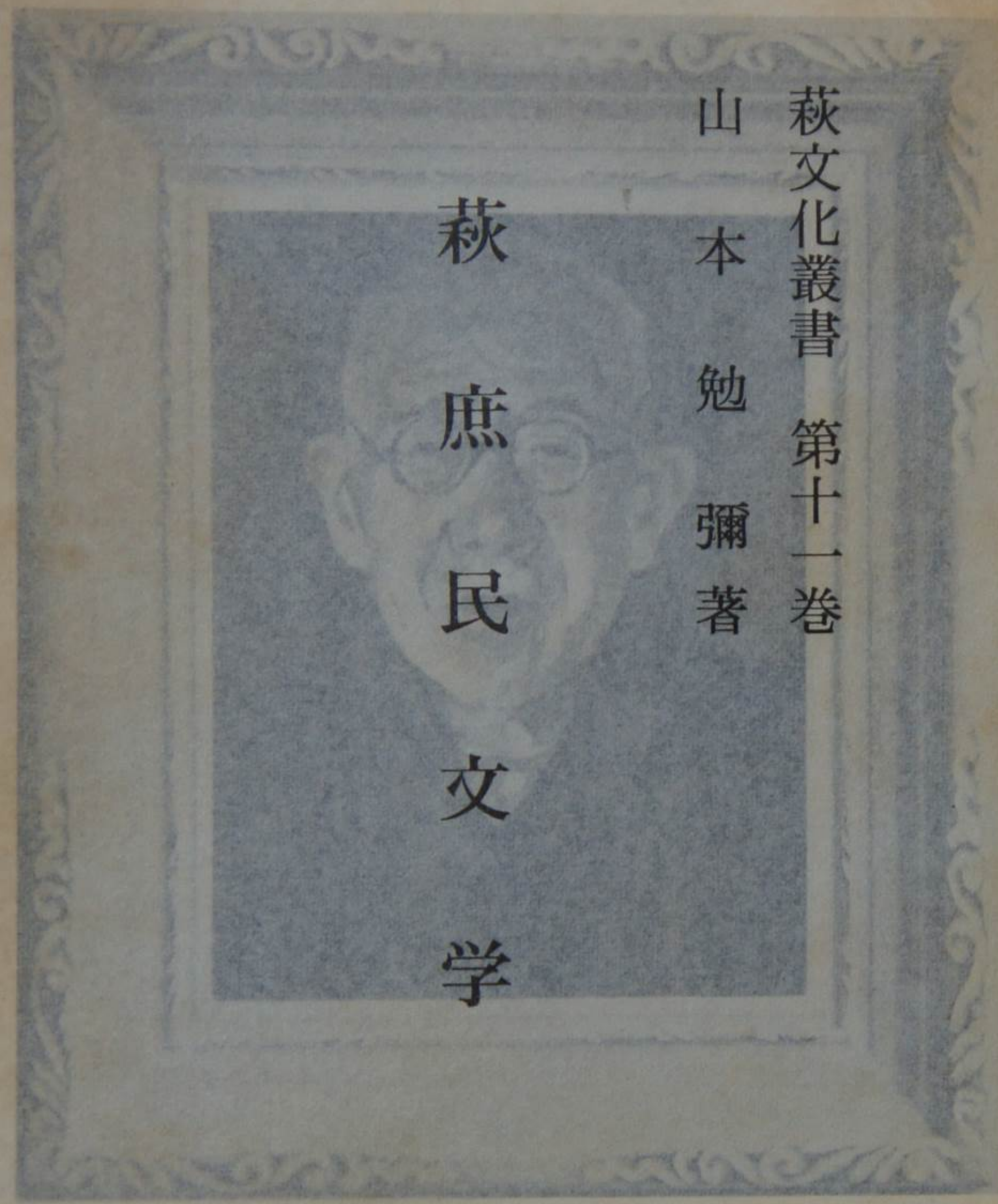
山本勉弥

萩原民文学

萩庶民文学

山本勉弥著

910.2
P74



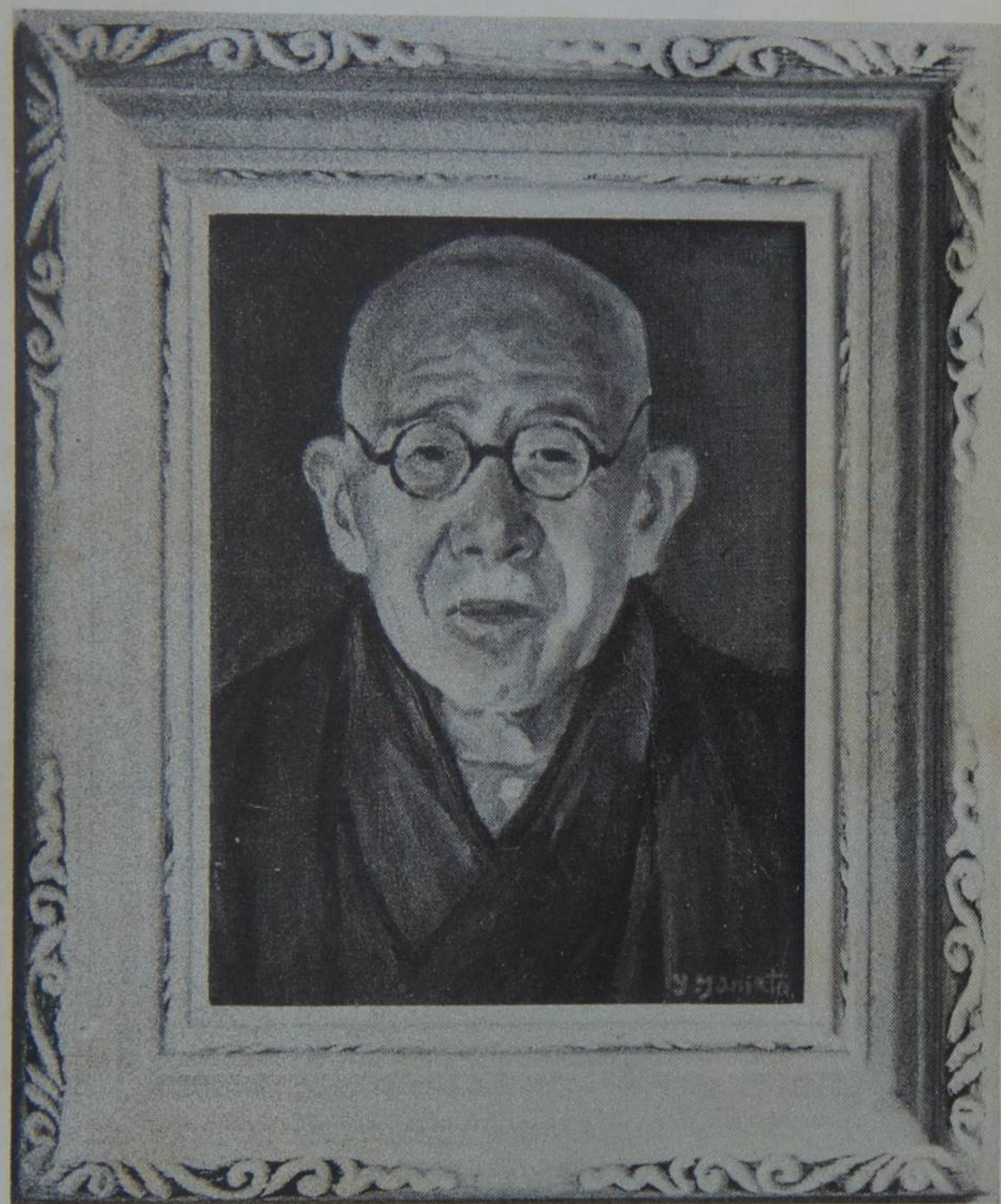
萩
庶
民
文
学

萩文化叢書 第十一卷
山本 勉 彌 著

著者肖像 大和義男画 (昭和三十三年)

34064

萩市立図書館



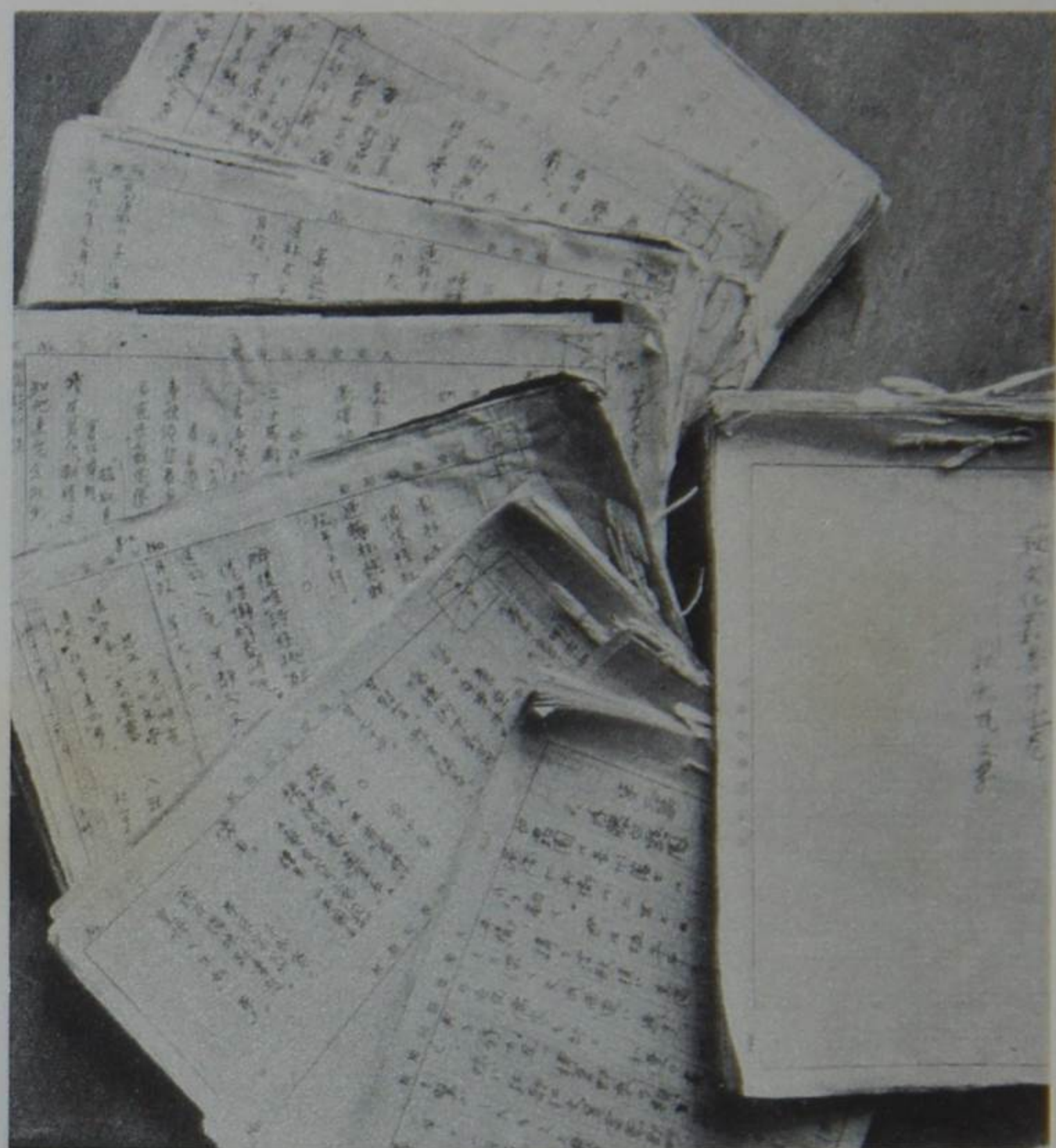
著者肖像 大和義男画（昭和三十二年）

山本 巖 翻著
蕨文外叢書 第十一卷

蕨 漁 貝 文 学

34064

蕨市立図書館



萩庶民文学原稿



著者居宅門

大正八年に新築以来昭和
三十五年逝去に至るまで
四十年間著者は萩市江向
四百二十二番地のここに
居住した。

序

故山本勉彌先生は、大正・昭和時代を通じて、萩に於ける文化運動の大先達でありました。先生の京都帝国大学・福岡大学卒業後、明治四十三年故郷の当萩市に病院医師として赴任以来半世紀にわたる本職の医師としての功績には顕著なるもの少くありません。同時に余業として、その情熱を傾けられた青少年指導、社会、政治、宗教倫理の諸運動に続き、後半生の総てを捧げられた郷土文化研究の領域では前人未踏の境地を開拓し、偉大な研究成果を残されました。この方面の著述については、昨年五月逝去されるまでに、萩文化叢書十巻の外に数冊の出版物並に長年に亘る定期刊行物等の大量を数えますが、なお死の直前まで原稿の執筆整理をせられつつあったものが、この「萩庶民文学」であります。

先生の没後特に御遺族にご相談して、この書を市公費を以て出版するに至ったゆえんは、主として先生生前の萩文化研究の功績に酬いんがためであります。本書が広く読まれて、郷土の文化的遺産が広く利用普及されることを望んでやみません。

なお本書の刊行にあたって、各方面の関係者から、多大な御協力をいただいたことを特に記して感謝いたします。

昭和三十六年一月

萩市長 菊屋嘉十郎

序

九華堂山本勉彌先生、この度更に「萩庶民文学」と題する一卷を上梓される。昭和八年九月刊行の「満鮮百話」以来すでに刊行された冊子を加えて十三巻に及ぶ。真に常人の能くするところでない。

史実史蹟等の紹介、史料の整理編集、または郷土逸話等の蒐録なども容易なこととは思わないが、これらは或は、他の研究家を俟つことも出来るかも知れない。しかしこの一卷に蒐録された資料と業績は先生独特のものである。

高名の作品を蒐録紹介することはさまで難事ではないが、忘れられた庶民の片々たる文蹟を辿ることは容易でなく、また一朝一夕に成就することでもない。永い年月の間に孜々営々として不断の努力が積み、克明周到な用意がなされなければならぬ。

一篇集むるところは何れも小詩型であるが、時代相を反映して善意素材に終始している。この種のものを持ただ一片の軽文学として一笑に付すべきではない。

江戸文学を構成する中軸は、国学者や漢学者のものより、馬琴、西鶴、近松、芭蕉、一茶らを始めとして、京伝、三馬、一九、種彦らから、蜀山人、江戸小唄に至るまでの町人文学に懸っている。これらは当時の庶民生活に多彩な夢を与え芳醇な香気を送った。希くばこの一卷を無名作者の低俗平板な雑作として軽視することなく、一卷を通じて世相を描き時勢を判じ、傾向を知り、作者とその周辺を想うならば真に興味津津たるものがあり、稀にみる郷土資料として貴重な文学である。

先生は古稀を過ぎ給うことすでに数年、四季訥々として郷土研究の探查詳述に傾倒されている。一人の助手もない老先生の姿は真に孤高尊大である。迂生幸に知遇をうけ茲に再び序を草するの榮に浴する。先生の加餐を祈るや切である。

昭和三十五年浅春

後 学 竹 内 八 郎

自序

毛利氏は文章博士で天皇侍講であつた文臣大江音人に淵源を發し、降つて文官政治家として活躍した大江広元の流れを汲んだ家柄であり、単なる武家出身ではない。藩祖元就は家風に従い、政治の上に文と武を車の両輪の如く併用した。次いで吉元は文教の府として明倫館を建てて士風を高揚し、学事を奨励した。かかる藩風であるから特に国学者儒者といわれる程の者ならずとも、一般の藩士は和歌漢詩の如きも一通り詠嘆し得る状況であつた。従つて儒者と称せられる人は悉く詩人と断定して誤りないと思う。是れ余は本書に於て漢詩を庶民文学の内に包含し、また詩の作例を探知し得ぬ儒者をも詩人として取扱つた以所である。

本書に載せる所の諸項目は文学として通観すれば大なる価値のあるものではないかも知れない。然し仔細に観察すれば機智縦横神童奇才の輩出せる萩、純忠愛国尊皇の気ほとばしる萩、醇厚篤実人情のこまやかなる萩、上下を問わず先蹤の雅懷漂える萩、文化の華燦然として史蹟に富みたる萩、山紫水明風光の輝ける萩を玩味嘆賞するに足るべく、萩を紹介説明せんとする本叢書の使命よりも捨て難き資料であると思われる。

大体本書に引用した作例は漢詩のみならず、他の項目に於いても、その集輯が不充分不徹底なるを我ながら痛感している。然るに敢て上梓世に問わんとするのはこの一書が因をなし、特志家の奮起を促し、地方史学上有意義のものに転成玉化せられんことを希うが為めである。至囑々々。ご愛読を乞う。

昭和三十五年五月

九華堂 山本勉 彌識

凡 例

- 一、本書の略歴中に極粗略のもの、または全く無きものがあります。此例は勤王志士に多くありますが、これは前著「萩の歌人」中に記してあります。
- 一、作者の年代は、「萩の歌人」では諸歌集に出ている歌のうち年次の最も古きものを用いたが、本書にはその人の盛時を用い、人名はその人に最も通りのよいものを用いました。字名は大抵省略しました。
- 一、漢詩は先ず一首を採録し、むづかしい字を避け、内容は作者を能く表徴するもの、景勝等を紹介したものを採録しました。
- 一、表紙は村上景介画伯（東京美術学校日本画科卒）、序文は竹内八郎氏、跋文は小島経彦氏に御依頼しました。いつもながら御厚情を謝します。
- 一、その他出版に関しては田中助一氏、藤沢武平氏、中村三郎氏の御助力を謝します。

萩庶民文学 目 次

序	萩市長 菊屋 嘉十郎	三三
自序	竹内 八郎	三二
第一部 萩漢詩人		
第一章	萩における古代学匠	一
第二章	東海集中の詩人	四
第三章	文化文政頃の詩人	七
第四章	安政頃の詩人	一〇
第五章	萩における近代学匠	一〇
第六章	殉難勤王志士	一五
第七章	明治の功臣	一七
第八章	明治初年の詩人	二〇
第九章	明治二十年頃の詩人	二二
第十章	大正以後の詩人	二四
第十一章	萩来遊の詩人	二七
第十二章	阿武郡須佐の詩人	二八
第二部 萩庶民文学		
第一篇	萩に於ける落書、落首類	三一
第二篇 雑 俳		
イ、前 書	イ、元文五年における落首	三一
	ロ、文政二年頃の落首	三二
	ハ、巴城士族行	三二
第三篇 狂 歌 師		
イ、内藤白露園	イ、小畑観世音奉納（抜録）雲鯨評	三三
ロ、毛利齊元等の狂歌	ハ、椿八幡社奉燈（抜録）素全評	三三
ハ、五言集中の狂歌師	ニ、春日社奉納（抜録）以竹園評	三四
ニ、山海集中の狂歌師	ホ、金谷天満宮はいかい朝清め（抜録）隠之軒評	三四
ホ、三浦半島守備当時の狂歌	ヘ、山本九華堂所蔵雑俳の短冊	三五
ヘ、黄鳥集中の狂歌師		三七
ト、江向製絲工場に関する狂歌		三九
チ、伊藤博文等の狂歌		三九
第四篇 ペルリ来航当時の狂詩及び諷俗歌		
イ、異国人渡来狂詩		四〇
ロ、ペルリ来航当時の諷俗歌		四〇
		四一
		四一
		四二
		四二
		四三
		四三
		四三

第五篇	都風流トコトシヤレ節	品川彌二郎	四三
第六篇	今様節	高杉晋作等	四四
第七篇	御植武士	久阪玄瑞等	四四
第八篇	俗謡		四五
	イ、ヨイシヨコシヨ節	木戸孝允等	四五
	ロ、俗謡	晋作、玄瑞等	四五
	ハ、よしこの(都々逸)	大賀大眉等	四五
	ニ、鴨緑江節	山県伊三郎	四六
第九篇	村田清風銅像綱引歌		四六
第十篇	萩の川柳		四七
	イ、川柳中興の祖	井上劍花坊	四七
	ロ、萩川柳会前期会員と其作例		四八
	ハ、萩川柳会後期会員と其作例		五一
跋		小島 経彦	五三
弔 辞		河野 通毅	五五
山本勉彌略年譜		田中 助一	五七
後 書			五九

第一部

漢詩

第一章 萩古代の学匠

山田原欽

原欽は寛文六年周防国防府に生る。当時祖父市兵衛家時は八十九歳父字右衛門時頭、後法躰号三休、三十八歳。五歳年長の兄彦太郎公貞母村上氏との五家族なり。山田家は小早川家に属し、数代高家大身、芸州三原における城持の武家なりしも、世態の変遷により父の時代より浮浪の身となりしという。原欽通称又三郎、名は頼熙、舜愈、字は原欽、号復軒、龍山。十一歳の時、父に伴はれ上洛、伊藤坦庵に学ぶ夙慧神童の称あり、儒名噴々。藩主綱広公に見出されて、江戸に伴はれ、更に京都に來りて勉学力精、萩に滞留しては多くの名篇を成す。後東光寺建立に關し、諫止する所あり、元禄六年七月江戸藩邸に於いて自刃すと伝へらる。年二十八。復軒遺稿あり。実に防長儒流の淵源をなした人である。

十一歳後水尾上皇に召出さる
尤愛神仙宮殿中。 新秋爽氣起三涼風。
誰知微賤少年客。 飽見金茎玉露濃。
西園寺羽林中朗將藤公枉高子草刈氏僑居僕陪席末
高人枉駕鴨河傍。 泉石催遊愛景光。
凝紫暮山多逸興。 清風添得一聲涼。
延宝庚申之歲
附記 此詩書 豊北町樋口彰一氏所藏
杜鵑 (先輩以線香一寸頃相試)

山田 原欽拜稿

春暮杜鵑度三月明。 客臆腸断兩三声。
汝思三歸去須歸去。 何使三遊人動三遠情。
與韓使洪世泰

言語相違雖有恨。 接眉可喜得伸懷。
殊邦周趣茲良會。 許下把微詞一屬中閣台上。

中津江夜雨 渡頭雨暗生。 肅然不寐能寐。 一夜打簾聲。
雲氣四山橫。 渡頭雨暗生。 肅然不寐能寐。 一夜打簾聲。
寄善賀首座 言如 和尚

主人和氣及三群花。 積善余慶今猶加。
紅杏過牆德不孤。 却將春色一寄隣家。

名は圓遵。天樹院開山。寛永十四年九月歿、年七十八。後大照院開山に追請せらる。遺著に宝訓集等あり。

通称平太夫。号雅真。画師。側儒。享保十九年六月歿、年八十六。
周南の父、通称治右衛門、諱長白、号良齊、雲洞、松軒。藩の講官。享保十三年七月歿。年八十一。遺稿あり。

名は文興、通称平介又は宣庵。号東門。良齊の長子。宝永四年三月歿年二十九。遺稿あり。

名雅真、道安の長男。明歿館教師。享保七年一月歿、年七十七。
佐々木源六

名雅令、源六の長男。明倫館教師。享保十四年十一月歿、年五十四。
佐々木源左衛門

多雨積鬱、偶有携牡丹花者、分贈栗君君戲呈。

小倉 宗爾

蕭々淫雨夜。無客不_レ思_レ家。休_レ言國香春。何如_二解語花_一。
名は實卓、通称宗爾、字子卓、号濟陽。藩主侍医。寛政三年八月歿、年六十一。

小倉 尚齋

嘗懷_二明壁_一臥_二荆山_一、辟命數回_二榛棘間_一、
白玉樓成_二烟霧散_一、天風拳_レ手_二謝_二塵寰_一。
通称萬太郎、諱貞、字実操、号尚齋。初代明倫館學頭。元文二年十一月歿、年六十一。

山縣 周南

麗海風帆
天青海碧大虚寒、東岸大和西岸韓、
無數白帆蝴蝶亂、長風吹_レ浪入_二雲端_一。
名は孝孺、通称少助、号周南。明倫館學頭。宝曆元年八月歿、年六十六。周南文集あり。

津田 泰之

字は子雅、号東陽。明倫館學頭。宝曆四年九月歿、年五十三。

瀧 鶴台

大東各勝芙蓉峰、突_二出青天_一一望幾重、
自_レ是芙蓉高_二白雪_一、更將_二白雪_一照_二芙蓉_一。
名は長愷、通称弥八、号鶴台。明倫館學頭。安永二年二月歿、年六十五。鶴台遺稿あり。

林 義卿

通称周介、号東溟、後に紫碧、仙曳。安永九年九月歿、年七十三。詩

名は長温、通称彦七、号霸山。藩公近侍。学を好み、詩作に長ず。宝曆八年四月歿、年三十九。霸山詩集の著あり。

仲子 岐陽

名は由基、号岐陽。明倫館都講、近侍。明和三年六月歿、年四十五。
名は惟忠、通称源兵衛、号鶴汀。厚狭毛利氏の家臣。明倫館に入り、山縣周南に師事す。明和六年歿、年五十余。

山縣 魯彦

席上賦奉呈諸君詞案下
佳客滿_レ堂玉樹斜、衣冠萬里間_二煙霞_一、
諸君詩賦知_二多少_一、處_二山川_一處_二花_一。
名は子淇、字は魯彦、通称季八、号洙川、周南門弟、歿年未詳。

曾野 有原

通称内記、字子泉、号雲門。周南門弟。宝曆十三年九月江戸にて歿、年四十六。雲門遺稿あり。

奈古屋以忠

蓬門無_二客至_一。幽獨更思_レ君。風度_レ竹涼早。雨餘山景曛
窺_レ園得_二樂地_一。觀_レ世知_二浮雲_一。古砌莓苔合。履声何日聞
通称松菊、与七、九郎右衛門、号大原。能吏、文事を好み、茶事を愛す。天明元年十月歿、年八十。

山縣 濟州

奉再和海皇季公
西方才子向_二東隅_一。繁_レ纒醉歌對_二玉壺_一。
此會千秋稀所_レ有。爲_レ吾莫_レ惜_二手珠_一中。
名は泰恒、通称次郎右衛門。号濟州棠園。周南長子。宝曆二年家督。天明三年二月歿、年六十五。

則などの著あり。

東郊 和智

鶴江台下水長流。台上蒼々松樹秋。
唯見白雲千載色。到_レ今仙子不_二歸遊_一。
名は棟卿、通称九郎左衛門、号東郊。縣門三傑の一人。明和二年六月歿、年六十三。東郊文集等あり。

山根 華陽

弘法寺
都門春色關_二繁華_一。大道霞飛車馬斜。
城上東風花如_レ雨。絃歌盡起_二五侯家_一。
名は之清、通称七郎左衛門、号華陽。明倫館學頭。明和八年十二月歿、年七十五。華陽文集の著あり。

小倉 鹿門

赤馬関西大海開。穩流遙送_二使查_一回。
王程無恙錦帆影。萬里雄風颯爾來。
名は実廉、通称彦平、号鹿門。明倫館學頭。安永五年十月歿、年七十四。

小田村 郎山

七月望陪徂徠先生泛舟墨水
載_レ酒扁舟過_二海涯_一。笙歌夕起月明時、
由來不_レ是人間調。唯有_二行雲天上_一知。
名は公望。通称權三郎、後文甫、文助、伊助、号郎山。明和三年八月歿、年六十四。遺稿あり。

田坂 霸山

鶴江一夜泛_二扁舟_一。揺落楓林明月秋。
兩岸清風吹不_レ斷。絃歌漂渺在_二中流_一。

有吉 公甫

通称新六、号高陽。学を好み、經史の他算教医藥の技にも通ず。天明七年九月歿、年四十七。

中山 玉山

名は政恒、通称又八郎、号玉山、周南の第五子、中山家を嗣ぐ。明倫館都講。天明六年九月歿、年四十八。

草場 居敬

指月峯
西峯當_レ舍宜_レ含_レ雪。光景一邊午影過。
可_レ見濃陰崩落後。銀盤堆上_二捧_二青螺_一。
名は中章、通称兵藏、号居敬。書家、儒者。元文二年二月歿、年五十九。

能美 子成

鱗島夕陽
鱗島波瀾上。渺茫翠色濃。
望中帆影盡。處_二夕陽紅_一。
通称吉左衛門、号子成。明和の頃所帯方を勤む。奈古屋以忠の俳友。

繁沢 規直

前名雲谷等直。享保五年儒家となり、改姓名。通称権兵衛、号南塘。規世の養父。宝曆十二年九月歿、年七十九。

繁沢 規世

号豊城。山根華陽に師事、明倫館學頭。門下人材多し。
平安湖納涼
指月城南明月秋。玉江山下玉江流。
夜來避暑都門客。半在_二舟船_一半滿_レ樓。
名は泰徳、通称六郎、号南溟。華陽の子。明倫館學頭。寛政五年八月

歿、年五十二、南溟先生詩集あり。

○ 瀧 鴻
通称鴻之允、号高渠。鶴台第三子。藩主侍講、寛政四年正月歿、年四十八。

○ 山縣 東原
名は泰道、通称少内、号東原。棠園の長子、側儒。寛政九年七月歿、年五十二。遺著詩文稿あり。

○ 佐々木龍原
佐々木俊信。号龍原、鹿野山人。都濃郡鹿野の人。明倫館講師。寛政十二年九月歿、年五十一。龍原先生文集あり。

○ 仲 東門
諱は煥文、通称与一左衛門、号東門、明倫館都講。文化九年歿、享年未詳。

○ 小田村藍田
覇城四時樂(春)
城頭日暖彩雲連。長袖細腰春服鮮。
金谷之花玉江柳。西東絡繹巨橋邊。

名は直道、通称文平、号藍田。明倫館学頭。文化十一年十月歿、年七十三。

第二章 東海集中の漢詩人

東海集は毛利齊房公、蘭腕公子(後の齊熙公)を始めとし在江戸の藩士が寛政七年正月、東都元日と題して作った詩を蒐集したものである。毛利氏本藩及支藩を通じ、同一題下に郡臣が和歌を詠進した例は

となる。寛政十一年五月歿、年五十八。

粟屋 信完
鶏鳴寔内曙光催。突兀金城佳氣開。
車騎縱橫彩霞裡。坐疑身已到蓬萊。

末国 常棣

長詩略
寛政四年町奉行。後行相府直目附。

中村 梁山

長詩略
名は恭、通称八郎兵衛、号梁山。藩主侍講、享和元年正月歿、年七十一。

齋藤 貞宜

○ 齋藤 貞宜
鶏鳴萬戸曙光開。鶯囀都門春色催。
偏喜今朝物華改。端居先勸屠蘇杯。
通称新右衛門。文政十一年頃行相府右筆、文政十三年三月歿、年五十七。

小倉 實文

長詩略
通称常右衛門、号南臯。鹿門の長子。侍講。文化五年十月歿、年六十三。

山縣 英

長詩略
通称俊平、世に県英と呼ぶ。号鶴江、書家画家。享和二年十二月歿、年四十九。

多きも詩はその例比較的少き中に、本書は六十四篇首の多きを輯集してある。本集は風雅の嗜み深い藩公が先ず一詩を賦され、続いて蘭腕公子はそれにならい、幼弱十三歳の身を以て一詩を作られたので、藩公は大に喜ばれ、遂に群臣に命じ夫々一詩を作らしめた。本集の序文を書いた鴻儒中村恭先生はかかる盛事は闕邸の喜びで、臣も抹舞自らを措かず、命に応じて是を捐録したといっている。書名はかかる経緯により出来たので始より特定したものでない。巻頭の公の詩の初句に東海とあるに依り、後人が東海集と呼び慣はしたものである。

東都元日(以下同題)

東海晴來淑氣催。鳳城高聳五雲回。
蒼々松竹千門色。可レ識齊含椒酒杯。

毛利 齋房

麻阜台頭霞廻生。春風明送意方平。
金鞍玉勒早朝客。共嘉清時文物明。

蘭腕 公子

臘畫春風盈二武城一。烟霞處々自鶯声。
千秋不レ改富峰色。呈レ瑞都門頌太平。

穴戸 就年

鳳城佳氣彩雲開。侯伯大夫車馬廻。
何減泰平三代化。家々同醉屠蘇杯。
通称宇右衛門。当職、当役等歴任。文政十年六月歿、年六十八。

堅田 就正

長文略之。
通称奎、後兵介。号湘江。学を好み、武技に達す。天明中萩城留守居

浦 就尹

栗屋 信完

渋谷 道勝

萬戸鶏鳴五夜天。朱門佳氣瑞雲連。
幾年爲レ客武城下。椒酒今朝陪二綺筵一。
通称源吉、一名章、号長南又は華岳。画を能くす。嘉永四年四月歿、年六十九。

柿並 正克

長詩略
通称半左衛門、御直目役中天保三年歿。

神原 深造

長詩略

三浦 利忠

長詩略
春風先發一枝梅。黃鳥嚶々求レ友來。
共指地城雲五色。何人不レ醉屠蘇杯。
行相府右筆。

熊野 遂良

長詩略

馬屋原範員

文政八年直目附となる。天保四年歿。

高杉 春明

長詩略

通称小左衛門、当職など歴任。文政七年三月歿、年六十六。

中村 敬

長詩略

通称九郎兵衛、号華嶽。梁山の子。学頭。天保七年十二月歿、年五十六。

次の二十一篇は東都元日の題下に東海集にあるものであるが、作者の職名などが判明せぬので、只作例のみを掲げる。

○ 初日高泉東海春。 都門楊柳帶レ霞新。
共欲清世界平化。 不レ讓当年擊壤民。

久芳 兼雄

○ 初日先輝東武春。 紛々車騎陌頭塵。
黄鶯翠柳千門色。 都入詩人曲裏新。

阪 時貞

○ 拂曉都門瑞氣懸。 祥風吹滿繞三山川。
武城喜見昇平化。 車馬翻々冠蓋鮮。

南 景福

○ 天鷄報レ曉瑞雲生。 風暖梅園黄鳥鳴。
萬國同欲太平化。 朝宗遙指武昌城。

志道 良悌

○ 朱門逢三上日一。 擒漢總才賢。 亦被流風化。
籬外東風淑氣長。 金城春色瑞雲揚。

河北 正好

○ 此生幸遇昇平日。 一曲高歌侑三壽觴。
曉鷄報罷物華新。 佳氣細縑上國春。

繁沢 氏明

○ 萬戸共欲太平化。 朝來風暖不レ揚レ塵。

脇 直興

○ 日暖都門霞彩濃。 升平流俗總時雍。
城中堪レ想朝儀美。 冠蓋周旋肅礼容。

小池 好澄

○ 祥風吹滿武江濱。 鳳闕望高霞彩新。
爲レ是明時仕途易。 脚レ盃先唱太平春。

松原 信晴

○ 城頭曙色對三陽春一。 上苑鶯啼物候新。
故酌床頭滿三樽酒一。 謳歌齊唱太平氏。

落合 紀國

○ 淑氣東風萬里天。 鳳凰城上敵三新烟一。
屠蘇樽酒凭レ欄酌。 一轉黄鶯庭樹前。

河野 通幸

○ 扶桑日出物華明。 朱邸層々雕戟迎。
請見芙蓉天際雪。 映來五彩鳳凰城。

林 以文

○ 東海天晴初日明。 春風吹滿武昌城。
富嶽襟襟千秋雪。 遙映金盃椒酒清。

小野 資純

次の二十二作家も東海集にあるものであるが、その職など余には説明がつかず、かつ、長詩であるので作例も省き、ただ姓名だけを列挙する。

実戸親朝、兼重洵美、平野一俊、長嶺實充、佐藤實文、佐竹行言、田中政行、野村孝美、安川公幹、赤川晏、椋木守静、柿並正長、山崎昌雄、馬來伸貞、宇多長仍、飯田善之、松田豊光、井上俊貞、三戸通

○ 風城淑景度レ江來。 嶽雪遙合三旭影一開。
薄宦蓬蓬三清政日一。 年々徒醉屠蘇杯。

梅田 敬之

○ 迎歲扶桑露景韶。 王侯躍レ馬武城朝。
共欲海内太平日。 把酒鶯笛處三調。

山田 真正

○ 東風拂レ曉既春晴。 萬国衣冠入三武城一。
此日朝儀比三周代一。 謳歌海内唱三昇平一。

齋藤 芳卿

○ 春風滿三武昌一。 樹色欲三蒼々一。 共醉金盃酒。 何爲思三故郷一。
都門風暖物華新。 邸第高連櫻水濱。

山中 久明

○ 出谷鶯聲報レ春處。 脚レ杯先聽太平人。
風城佳氣曉蒼々。 車馬如レ雲入三建章一。

中原 政行

○ 迎歲都門曙色開。 早鶯一轉報レ春來。
人間欲樂太平日。 欲レ頌三南山一愧三不才一。

大田 謙

○ 萬家漏レ鼓報三鷄晨一。 車馬翻々來往頻。
自是都門多三樂事一。 新詩先賦太平春。

青木 雅明

久、豊田信文、兼重榮貞、李家達
(田中助一補記) 右のうち、安川公幹・赤川晏・椋木守静・李家達の四人は医員である。

第三章 文化・文政頃の漢詩人

東海集中の詩人の多くはこの部に入れてもよいのであるが、既に前項に纏めてあるので、茲には省いた。この項には学匠は勿論能吏、医師書家などが難然として混在する。

山田 時文

○ 寄延齡松
大藩五馬幾回停。 普植小松千尺青。
可レ識龍光長得レ佩。 榮名新賜祝三延齡一。
字は運平、宝暦七年秋に生る。華陽を師とし、業成りて、熊毛郡三丘の徳修館に教ゆ。後明倫館に書を講ず。文政三年十月歿。北海集あり

栗山 献臣

○ 初春祝道
論レ道會レ文賀宴開。 愛レ賢好レ士賦三康哉一。
政刑不レ改帝堯載。 喜見年華去又來。
二代孝庵、名は献臣。藩医。寛政三年十一月歿、年六十四。

海潮寺良遂

○ 奉送栗文仲之赤閑
採藥歸來赤水隈。 使槎相送發三蓬萊一。
爲傳懷裡舊藥。 君自神仙不死方。
藩医。

赤川 玄清

奉賀栗文仲先生六十初度

河村 養現

本詩略

藩医。

寄延齡松

北条 氏輔

世子自裁十八公。高枝貞幹鬱青葱。

歲寒木管傲霜色。雨露濺餘封爵中。

箱根湖上

楊井 盛之

芙蓉万仞挿雲端。影落湖心一白寒。

休怪怪行人頻俯仰。水中半天一時看。

通称謙藏号蘭洲。直目附。文政六年八月歿、年六十二。

羽衣台彩霞

内藤 昌盈

高台處。花柳映如繡。

坐怪羽衣人。嬋娟飄舞袖。

通称順太郎、後十郎兵衛、号静修。山根南漢に師事。能吏。天保五年八月歿、年七十六、官暇漫吟の著あり。

瑛賜題探得山水清音侵韻恭賦

奈古屋登忠

流水繁門倚碧峰。帶風朝暮有清音。

哦洋認得多幽意。閑適無心撫素琴。

通称喜代槌、後登。初名忠式、忠明。安政二年十月歿、年六十一。

寄延齡松。本詩略

八谷 通全

通称源藏、名は通全後通時。能吏。安政四年八月歿、年五十。

寄延齡松。本詩略

玉井 克所

万延元年十一月歿、年五十三。

姥倉新渠

宍道 芝齋

一道姥川晴更清。灣々恰好架涼棚。

漁歌農唱東西岸。早旭當爲三絲竹声。

名は貞、通称直記、後浪江。号は初め紫丘、芝齋、醉宜。能吏、詩書を能くす。安政五年九月歿、年六十。

龜峰歸遇雨。徹夜鳴不歇。

栗山 景範

起望三昨游處。惟見滿山雪。

通称玄厚、後幸庵。孝庵献臣の養孫。侍医。天保四月十月歿、年七十。

雪中遊三山寺

香川 政記

樹々装花疑有香。鶉衣得訪禪房。

世間一樣堆銀界。殊覺幽窓茶味長。

通称千藏、後惣右衛門、号甫田、巨田、松陰少時の師。明治十六年十二月歿、年七十二。

題牧牛圖

西村 瑛

牧豎去何處。夕陽紅滿坡。

老牛眠不起。背上落花多。

通称養眞、号眞齋。藩医。詩を頼山陽に学ぶ、天保二年九月歿、年四十二。学劍南齊稿と題する詩卷あり。

至山口謁君公辱亡兒追悼恩言不堪感泣賦

田北 太中

深喜吾君無疾病。拜來寬惠和温姿。

老賜將断一言賜。徹底黄泉地下兒。

寄延齡松

北条 氏燕

誰栽松樹薩摩公。蓋影橫檐自鬱葱。

閑座清陰聽天籟。船延不味一庭中。

名明清、通称兵熊後直記、安政二年歿、年五十九。

霧口山莊待月

湯浅 栖霞

通称主水、後善九郎、号清齋。能吏。安政五年十一月歿、年五十六。

割三折陰陽一現三尊。列神屹立蒼溟原。

借三來儒釈一齊三吾国。夢寐勿忘天照恩。

震八月念四賜宴於江風山月樓恭賦

坪井 正裕

張三宴江樓一賜三酒杯。山光水色入樓開。

初知機務城中事。却自悠優不迎來。

通称九右衛門、号顔山。吏材あり手元役を勤む。文久三年十月山野獄にて刑死、年六十四。

霧口山莊待月

楊井 盛良

鳴蟲声湧己黄昏。初月將升洩白痕。

隔水冥煙燈火淡。半江山影數家邨。

通称孫太郎、号蕙洲、静齋、青坡、長福村叟、三希。盛之長男。万延元年五月歿、年六十四。

旧識春風到三草庵。青囊精入酒鳴壘。

欣榮好借三北隣樹。董老自稱呼三杏南。

通称貞庵、字九成、号春齋。秋九成の署名あり。侍医。當時一流詩人

日野 韶

夏日偶作

高島 恭

簪鈴響断午炎加。困睡醒來日未斜。

一掬涼風無三覺處。起澆三盆種種佛桑花。

通称良台、号醉茗、墨潭、杏園、明治十五年三月歿、年七十九。

薄醉常無酒。卑官時有饑。

普 喜齋

錢貧與才拙。保得一寒衣。

名は政恒、通称延藏、後齋と改む。明倫館舎長、後深川村長。孝子。明活四十二年一月歿、年七十五。

雪夜渡松水橋

吉田 賢良

松水橋頭夜色寒。北風不止雪漫漫。

雁鴻一陣留三筇處。雲斂三東山一月色團。

通称大助、号龍門。松陰養父。天保六年四月歿、年二十九。賢良先生詩稿あり。

老去興三癡千里行。春寒况又雪盈程。

所遭是命所三安宅。止三說三離別情。

秋淺東籬菊未黄。獨斟三濁酒一對三重陽。

山根虎之助

忽從千里傳三書信。恰值三佳辰三喜欲三狂。

通称洞庵、号雪堂。藩主侍医。當時医家棟領。明治五年五月歿、年七十九。遺著詩稿あり。

重 陽

能美 淑

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

通称千重陽。

名は完、通称恭伯、号雲庵。待医。慶応二年九月歿、年七十八。
○ 宮木 恭伯
晩歩尋梅 残雪長堤路欲迷。
尋梅晩歩出幽栖。 笛声遙在断橋西。
淡月横斜人不見。

第四章 安政頃の詩人

題舎弟座像

翁学ニ神錢ニ殉猶レ死。 兄弟一世侶菽薇。
鶴鶴原上雁略啼。 知是死生何不違。
名は吉蔵、号雪翁。郡司右平治兄、三浦觀樹殿父。長寿。

冬懷 旧

仙郷無レ路聽ニ温言。 空拜ニ遺歌ニ拭ニ涙痕。
想見漫々盈尺雪。 驅レ車曉入ニ九重門。
笠置

昔日行宮迹已陳。 白沙翠竹夕陽津。
仰看山色留ニ餘憤。 大石張レ拳欲レ撲レ人。
一名静、号天籟。玄瑞兄、安政元年三月歿、年三十五。

田子浦望富山 自古名山詞賦多。
瞻望無處無風景。 千秋絶調赤人歌。
一等美觀田子浦。 震後対月有感

勅題寄山祝 世路高低七十年。 筆歌筆舞樂レ録レ年。
草堂歲暮無ニ佗事。 山人ニ御題ニ待ニ改年。
卅歲甘爲ニ章句囚。 優悠去試浪花遊。
不レ知破レ虜將軍箭。 能洞ニ吾徒胸骨ニ不。
忠正公二十年祭 蓋世功成只祠廟。 經ニ邦謀ニ遠見ニ精神。
厭聞林外啼鴉恨。 腸断廿年思慕人。

目代霜葉 林間温レ酒坐ニ団樂。 吟到ニ斜陽ニ興未闌。
遮莫秋風吹ニ錦繡。 散爲ニ紅雨ニ亦奇觀。
絶命詩 長劍曾提東海隈。 先鋒隊裡欲レ爭レ魁。
豈圖今夕病ニ風疾。 素志未レ灰身先灰。
通称九郎右衛門。嘉永六年江戸にて病歿、年二十五。

秋良 貞温 通称敦之助。号貞温、坐山、桃處。藩老浦家々宰。明治二十三年十月歿、年八十。
○ 難波 覃庵 通称伝兵衛。藩老清水氏の世臣。明治二十一年一月病歿、年七十八。
波多 野成 疾風知ニ勁草。 先哲不ニ吾欺。
今日逢ニ窮厄。 人人心可レ鏡。

田辺 玄齡 鳥兔鬢々節序移。 園林花落綠陰滋。
喚醒二十年前夢。 杜牢啼過殘月時。
通称忠右衛門、初名政辰。号球湖、樂山。大島郡代官。山口師範学校教諭。明治二十九年三月歿、年七十三。
○ 送日野宗春遊学 清明時節草鞋輕。 单身孤劍向ニ帝城。
此際不レ言多少恨。 春風々裏送ニ君行。
通称耕助、初名大田市之進号春江、御桶隊總督。明治四年五月歿、年三十一。
御堀 直方 掌握兵權二百年。 蹉跎日月既衰運。
四分五裂將成レ勢。 何者老婆周且施。
通称真五郎、号水石、凡民、白鷺夫志士。戊辰役諸所に戦ふ。大審院判事。大正二年十月歿、年七十六。
堀 義彦 征衣綻尽旅囊空。 孤劍猶餘意氣雄。
北海風濤審ニ形勢。 欲レ修ニ三島ニ旧隳。
通称富太郎、号巨川。松門志士。明治廿八年五月歿、年五十六。
岡部 利濟 奉次松菊園先生芳礎 芒鞋踏レ雪遠探レ梅。 願有ニ黃鸝ニ能作レ媒。
假使ニ南枝ニ花未レ發。 清香早已入レ詩來。
杉 民治 雪銷ニ一路ニ覺ニ喧加ニ。 唼屐來敲竹裡家。
從レ此閑人公事急。 谿橋風信到ニ梅花。

父居ニ西海ニ蒙ニ嚴譴。 兒在ニ東関ニ遭ニ震災。
萬里音書共隔絶。 月明還照ニ兩心ニ來。
通称徳祐、一名親之。号憂庵、枇杷山人。元寔男。松陰親友。安政六年八月歿、年二十六。杷山遺稿あり。
詠 西史 西土全洲睡レ手収。 歷山王後更無レ儔。
可レ憐窩德祿中戰。 一蹶長爲ニ孤島囚。
忠正公廿年祭 新樹森々緑美哉。 思公昔日手親栽。
自非ニ培養ニ適ニ天意。 爭得如今枝葉堆。
椿瀬梅林 幽谷東風絶ニ世紛。 近林遠樹望將レ分。
春光一脈何辺早。 竹外凝成点々雲。
通称発藏、源左衛門更に藤兵衛に改む。号梅顛、樸璠、節軒、四窮陳人。能吏。明治五年八月歿、年六十七。遺稿あり。

送 別 相逢未レ久忽相分。 明日各天千里雲。
頼留一幅丹青迹。 對レ此聊將擬レ對レ君。
通称萬里助、号瘦竹。能吏。通想弟。明治八年歿、年六十六。遺稿多。
南明靈佛 飛香断続暖煙濃。 寺在ニ南山第一峰。
村路行知ニ春事好。 度レ花声緩午天鐘。
小湊遺稿あり。

伊勢 小松 八谷 通恕 井上 逸叟 青木 周弼 內藤 志

新山 忠 御堀 直方 堀 義彦 岡部 利濟 杉 民治 能美 遠

疾風知ニ勁草。 先哲不ニ吾欺。
今日逢ニ窮厄。 人人心可レ鏡。

晴雨小稿あり。

時山 養直

醉裡漸知春恨深。花時況又雨簾纖。
可二人新緑期將近。遮莫落紅吹入簾。

通称直八、号白水山人、海月坊、海南、松陰門下。越後役戦歿、明治元年五月、年三十一。

浦 鞆負

高亭春三月。花苑聽三黃鶯。

杯酒恩光厚。清吟賦三鹿鳴。一
名は元翼。藩老国司信濃の第二子。元治甲子の変后采邑阿月に退き、正義を守りて藩論の回復に尽す。明治三年六月歿、年七十六。

鳥田 良位

七十餘年夢一場。浮雲富貴笑三白茫。

半池花香春日長。
幼名多門、後改通樹、通称良位、号鳥園、鉄脚。藩主待医。藩医学所教授。明治十年八月歿、年七十四。

第五章 萩における近代学匠

本項には明倫館学頭山県太華より市川文作に至るまで藩校、家塾経営者、学校等に教鞭をとりたる主なるもの卅五首を載せた。

小湊 晚鏡

古刹門前旧釣磯。細鱗巨口入レ秋肥。

山県 慎

晚鐘俄駭幾人散。各自牧レ竿南北婦。

通称甚右衛門、号沙村、青嵩、椿山、橘里、臥雲山人。都講。天保十

四年七月歿、年四十四。遺稿あり。

寄延齡松

公子裁レ松長澤濤。常銜二恩露二密陰深。

山縣 慎

清標長帶凌霜色。託得主人不昧心。

通称永藏、後慎平。号墨儼、西溟釣徒。鶴江の養嗣子。侍講。書家。明治六年三月歿、年八十八。

長相 思

天涯長相思。秋夜白露滋。

河野 通賢

牀下蟲声冷。西風明月遲。

美人在三西土。南北隔三雲達。

楼上懸三遙夢。燈下泣友離。

音信如何通。低頭涕淚垂。

憂心飛揚甚。思レ之復憶レ之。

関山三千里。長相思未レ夷。

号鴻陽又は歳寒亭。儒者にして武術にも通ず。安政元年十一月歿、年七十。

中村 任

開レ戸即青山。壓來風案間。朝陽與三暮靄。

皆解老夫顔。(此は八十五歳の作江向の居宅を詠じたるもの)

通称伊助、号牛壮、止々庵。明倫館学頭。明治二年四月歿、年八十

七。

瀧 墨華

通称茂兵衛、九華の子。儒業を継ぎ、明倫館に教鞭をとる。文久元年

四月歿、年四十四。

通称半七、号太華、芸窓主人。明倫館学頭。慶応二年八月歿、年八十

六。

小田村 惠迪

寄延齡松。本詩略

通称吉平、号石門。藍田の長子。弘化四年六月歿、年五十七。

高渠の子、通称茂太郎、後信平、号九華。侍講。天保九年七月歿、年

五十四。

通称少作、号榕所。東原三男。都講。文政十年五月歿、年三十三。

菅分公子澤。貞表主人榮。

孰識奏封後。有若大夫名。

舊欲花有酒。新交酒期花。

春晚花如錦。樽々対酒歌。

通称新左衛門、号涪溪。山県太華に従学。諸職を歴任。明倫館学頭。

明治十二年五月歿、年八十四。

通称猪之助、後左門、号履軒。明倫館学頭。元治元年六月歿、年六十

一。

得家信有感

客中心事易驚秋。劣就雁魚相共謀。

讀到尊親書一紙。行々只說病之憂。

通称甚右衛門、号沙村、青嵩、椿山、橘里、臥雲山人。都講。天保十

四年七月歿、年四十四。遺稿あり。

絶命辞

文臣幸過古稀年。堪レ愧無三何報三昭天。

皇史漢書記三附考。未レ成偏托三後人一傳。

通称助三郎、尚藏。初名実章、実美、号遜齋。明倫館学頭。明治十一

年五月歿、年七十四。

山口偶成

逆旅無三人与レ我談。燈前沈黙夜將レ酣。

世情物態恍如レ夢。亡者七分存者三。

景物感情經眼時。性靈一脉吐爲詩。

品評只任傍人意。似采肖唐渾不レ知。

通称恭平、号紫溟。墨儼の子。侍講書家、慶応二年九月歿、年五十

二。

十二月十四 大雪

滿郊積雪夜更移。銀界月明光陸離。

想起年當復讐士。吉良館外攻門時。

通称文之進、一名正一、后正韞。号韓峰。都講。明治九年前原変後自

刃。年六十七。玉韞先生詩存あり。

風動三梧桐二雨屢鳴。燈前一夜泣吞レ声。

憂レ親愛レ朋且憂レ國。二十年來大不レ平。

通称矢之助、一名敬之。号齋海。松陰の親友。世子侍講。元治元年九

月歿、年三十六。

土屋 根

通称茂兵衛、九華の子。儒業を継ぎ、明倫館に教鞭をとる。文久元年

四月歿、年四十四。

瀧 墨華

通称茂兵衛、九華の子。儒業を継ぎ、明倫館に教鞭をとる。文久元年

四月歿、年四十四。

瀧 墨華

通称茂兵衛、九華の子。儒業を継ぎ、明倫館に教鞭をとる。文久元年

四月歿、年四十四。

瀧 墨華

通称茂兵衛、九華の子。儒業を継ぎ、明倫館に教鞭をとる。文久元年

四月歿、年四十四。

瀧 墨華

通称茂兵衛、九華の子。儒業を継ぎ、明倫館に教鞭をとる。文久元年

四月歿、年四十四。

冬 曉

睡覺多如鉄。 曉窓殘月沈。
群禽声忽絶。 霜集擊寒林。

岡本 成章

益田 親字

年光乍度老心驚。 欲下以三詩篇一報中寵榮上。
祭典尤宜新緑節。 招魂呼過杜鵑声。

通称源兵衛、号梅村。能吏、儒者。明治三十二年三月歿、年八十七。

馬島 春海

山館高眠穩。 無三人呼三阿誰一。
点猿窺二飯桶一。 馴鳥汗書堆。

中村 弼

長詩略

通称百合蔵、初名愚、号治堂。牛莊の長子。明倫館学頭。明治二十八年十二月歿、年七十三。

中村 鼎

老去偏知生有レ浮。 吟筵尚記旧時遊。
東風一陣花如レ雪。 故向二愁人鷓上二稠。

通称勘助、初名亀三郎、号容所。牛莊次男。講師。明治十九年四月歿、年五十七。

岡田 馨蔵

野鹿馴レ入古帝州。 一區名勝儘二優遊一。
回レ首三笠山頭月。 影入木津川上流。

初名馨、号致翁、致曲堂、梅月叟。明倫館都講。明治十五年九月歿、年七十。

名は兼濟、号虚舟。土屋齋海に学び、文名高く奥平謙輔と併称せらる。虚舟遺稿あり。内閣書記官。明治二十二年一月歿、年四十八。

坂上 忠介

山濠飛馳吼危嶺。 虎魚退レ雲紫二老杉一。
宵宿線亭源耐レ記。 雨痕猶認染仙衫。

列名恒、号寓所、作樂山樵、晚年冲所。明倫館教授。江戸有備館教授。明治二十三年十月歿、年七十三。詩集一卷あり。

繁澤 規員

長詩 略

通称光太郎、一名潤。号括囊。明倫館都講。明治二十三年八月歿、年七十三。

天野 謙吉

名は華、号梅溪。明倫館都講、後藩吏。明治四年三月歿、年五十六。遺稿あり。

来島 小覚

愛蓮之眼色尊レ青。 青白由来有二蔡名一。
植得無レ多君莫レ怪。 此花在處即五城。

号無庵、薛堂。儒者書家にして仏教篤信者。明治四年私塾を開く。明治十六年十二月歿、享年不詳。

吉松 淳蔵

惜 春
九十春光欲二暮辰一。 山櫻開盡鳥声頻。
惜レ他片々花如レ雪。 散作野田祠畔塵。

萩平安古に家塾を開く、号松山、老龍。

中村 雲樹

日暖山川瑞氣新。 一年從レ是肇二嘉辰一。
東風解レ凍群陰伏。 占斷十州千里春。

岡村 酌中

風沙幕宿湊河辺。 憶起忠臣授レ命年。
八字碑銘千載下。 行人垂レ淚拜二墳前一。

通称熊七、又熊彦、号實齋。山口明倫館教授。明治六年九月歿、年五十九。實齋詩文集あり。

中所 可乘

曝書記感
先考貽レ吾幾許錢。 遺金購得幾陳編。
而今欲レ悔何曾及。 唯買二空言一弗レ買レ田。

号魯堂。儒者。妙元寺住職。明治二十二年八月歿、年五十。

富永 有隣

半窓霜氣紙婆娑。 竹外寒声吹レ月多。
洋虜日刊時説去。 四人微笑一燈華。

四人とは松陰、中谷正亮、佐世八十、履齋なり。一名直彦、通称弥兵衛、字は有隣、号履齋、陶峰、蘇芳。松下村塾教師、鋭武隊を率いて出征。明治三十三年十二月歿、年八十。

馬島 光昭

天野翁見示一絶席上歩其韻
不レ管碧天陰與晴。 傾レ杯談舌自縦横。

抄宗寮上春星会。 別有二三水輪二分三外清一。

落谷 濟三

海上落日萬家烟。 故國秋晴喬木巔。
行想先公行樂述。 復看遺老泣二山前一。

都講。後小学校長。明治十年八月歿、年六十六。
追悼小濑先生
十数年前辞二故園一。 京華清興去無レ痕。
小濑江水依然在。 旧友追隨弔二旅魂一。

市川 文作

講師。能吏。山口中学校教諭。明治三十五年八月歿、年七十三。

第六章 殉難勤王志士の漢詩

吉田 松陰

君辱臣死是此時。 虎頸狼頭爲相貌。
廟堂一日苟安計。 百萬城中無二男子一。

久坂 玄瑞

松陰詩稿などあり。

入京師
水明山麗澹二秋氣一。 重入二神京一拜二禁圍一。
今日如レ珠多二感涙一。 紫雲掩映賤臣衣。

江月齋遺稿あり。

高杉 晋作

題二焦心録後一
内憂外患迫二吾州一。 正是存亡危急秋。
唯爲二邦君一爲二家國一。 焦心碎骨又何愁。

東行遺稿あり。

入江 九一

有レ聞松陰師東行
梅雨陰々昼黒昏。 黯雲天地滿二吾怨一。
相知永訣行レ無日。 雖レ欲レ言無二言可言一。

泊京都聞子規

身是山陽一匹夫。寶來微志客京都。半夜眠醒聞杜宇。鄉情欲動我疑吾。

寺島 昌昭

戊午幽囚中作

竊得勤王報國名。雙刀先納匣中鳴。家門禍福昇平事。依旧担頭喧雀聲。

吉田 秀實

題淵明採菊圖

三逕欣看秋菊閑。一枝手折對南山。意中誰識義皇趣。晚節長存天地間。

松浦 松洞

辭世(三十九歲)

日明何唯武藏州。今昔光臨五大洲。爲客來能遊異域。空過三十九中秋。

周布 麻田

宿滝口

此地曾埋虜使頭。英威千歲護神州。旅窓一夜風濤惡。夢至喜望峰外洲。

來原 良藏

欲報君恩業未央。自羞四十五年狂。即今成佛非我意。願率天魔輔國光。

長井 雅柔

無題

覆徐何必論成敗。取義爲仁先着鞭。誓汲三三架橋下水。直瀝東海濯腥羶。

中谷 正亮

○

衝寒奔走無嫌辛。閨閨憂孀屬一身。滿目蕭條風雪裡。武思忘仰有心春。

杉山 律義

長野幽囚中作

物議紛々萃一身。老親思我我思親。惠然独有茅檐月。猶照人間不孝人。

大楽源太郎

西山詩存あり

多年心志遂難演。愆爲下郎被羈繫。君為臨死無遺恨。黃泉長與楠公遊。

国司 朝相

初夏河源行

朝來山雨洗埃塵。兩岸景光綠一新。石瀨輕舟駛如矢。即今初見利斯民。

福原 元備

帝念確乎在攘夷。勤王未起列藩師。我公心事何須辨。只有青天白日知。

前田 利濟

○

仰憂三母子俯妻子。無限情懷欲語誰。仲子同囚音信絕。季生也是在天涯。

中村 清旭

○

元是江家神聖裔。豈無一士憂三時勢。吾揮孤掌回盤根。不問刀鋌鈍與銳。

檜崎 清義

温公破甕圖

一碎救人事絕倫。當時果決已如神。即知他日廟堂上。博愛蒼生是此仁。

渡辺 暢

甲子元旦

再拜三鳳下一寂天台。憶見慷慨無極哉。識是世間賀新歲。當時國賊漫徘徊。

山田 彪

十年心事世相違。回首城中人盡非。今夜燈前無限恨。滿天風雨送君歸。

有吉 良明

○

祖筵開得一樽同。欲別愁心懷那窮。從是離居多歲事。願須努力建勳功。

三分利重忠

○

稱德三郎。奇兵隊士。禁門之戰被創屢腹。年尚弱冠。

乃木 高知

闕古孤燈下。恍爲萬古思。夜深將就睡。霜月滿天涯。

阿座上正藏

送松陰先生東行。案成心下揭義名。歸上。心事何愁勝會違。慘日斷雲行不盡。京城風物思依依。

河上 正義

○

仰不耻天懷我自吾。縱令斃不借二人扶。平生膽氣都如此。正是堂々大丈夫。

下瀬 雅高

○

祖筵開別女兒常。男子須存鉄石腸。想到湊川一回首。想君紅淚濕征裘。

長野 政明

京師作

賊勢如潮砲雨飛。快哉我死與心違。日岡草木秋將殘。首陽猶期留晚暉。

佐久間義濟

○

龜背寄身踏海仙。龍宮奇跡至今傳。追尋三万余年夢。都付宮中一練煙。

山田 公章

○

孤客仰天感不窮。深憂何處訴孤忠。君冤今日未能霽。千載洪恩奈此躬。

玉木 正弘

○

通稱彦助、文之進子。繪堂之戰に死す。年二十六。

木戸 孝允

○

去歲千軍逼我疆。今朝孤劍入他鄉。浮生萬事變如夢。一片依然男子腸。

山縣 有明

○

馬革裹屍元所期。出師未半豈容婦。如何天子召還急。臨別陣頭淚滿衣。

伊藤 博文

第七章 明治の功臣

○

豪氣堂堂橫大空。日東誰使帝威隆。高樓傾盡三杯酒。天下英雄在眼中。

伊藤 博文

幽囚有憾

三十馬齡過半生。五州山水踏縱橫。
千言奉策終蛇足。影暗縲囚燈滅明。

廣島淹留中元旦作

奉使淹留廣島城。欲酬專對四方名。
君冤未霽歲還改。其奈國邦臣子情。

倉江婦帆

犢尾岩低潮候通。大悲閣響粉墻崇。
知他漁老全牧釣。帆影相追薄暮風。

明倫館都講

囚中有感

四十年來重五倫。誠忠却爲不忠臣。
月明猶是有私否。不照檻倉獨坐人。

金谷菅廟

長槍成列羽毛毳。儀衛森々警蹕間。
想起青年履公駕。春風一隊入東関。

肥後陣中作

水色如銀月色流。砲声漸絕夜悠悠。
清風一陣吹塵去。占得球磨川上秋。

越濱林泉

此地清遊幾度陪。捧鱸膾滿盤堆。
重來泉石多荒廢。不見群猿乞食來。

秋風一別出三郷関。一事無成徒往還。

井上 馨

穴戸 世衡

指取 素彦

前原 一誠

野村 素軒

山田 顯義

杉 孫七郎

品川彌二郎

兩岸草蟲鳴不歇。颯颯又對丈夫山。

千尋怒浪落中天。樓閣摧殘庭化淵。
人世浮沈君勿問。桑滄交轉寸眸間。

黃夢菴主人とも稱す。

題馬山陣図

馬山雪滿寂孤營。退却猿郎八萬兵。
他日碧蹄君若在。敢教阿弟擅功名。

長添招魂

松林面海露葱々。屹立豐碑紀世功。
山岳長留名字在。弔來哀淚洒西風。

凱 旋

皇師百萬征強虜。野戰攻城屍作山。
愧我何顏看父老。凱歌今日幾人還。

忠世公廿年祭

往事回頭如倒波。杜鵑時節感尤多。
憶昔軍隊齊揮淚。護柩香山唱輓歌。

讀 兵 書

一人敵耳劍何須。足記姓名一書亦迂。
他日欲成三疊虜策。苦心幾歲說孫吳。

通稱謙輔、号弘毅齋。戊辰役戰功あり。新潟県権判事。明治九年前原一誠に組し刑死、年三十七。弘毅齋遺稿あり。

把杯看古劍。燈下斷人愁。

野村 靖

橫村 正直

國重 正文

乃木 希典

児玉愛二郎

奥平 居正

三好 重臣

一醉遭三昭代。年華歎急流。

初の軍太郎、号秋畝。奇兵隊士。戊辰役越後出征。陸軍中將。明治三十三年十一月歿、年六十一。

倉江婦帆

點々布帆截波還。晚霞一抹幾灣々。
不輪摩詰舟青妙。描出淡濃湖上山。

通稱半九郎、号百里。大審院判事。明治二十九年十月歿、年五十六。百里遺稿あり。

偶 成

朝三暮四拜樵家。贏護妥協顔色斜。
公議不レ言囁黙々。何人先戮両頭蛇。

惜 春

名敬高通称百太郎、号得庵。維新功臣、陸軍中將。明治三十八年四月歿、年五十九。詩文集あり。

惜 春

花飛蝶去昨遊非。仰見鴻峰風色微。
不獨幽人一惜春切。群禽猶是慕殘香。

幼名、駒之進。福原越後嗣子。変名鈴尾五郎、一名親徳。大審院判事。明治十五年八月歿、年三十五。

哭藤井聰松

欲下將三詩酒一巾中幽冥上。蕭瑟西風月滿庭。
空院無レ人秋又暮。階前松竹為誰青。

号周峯。大正二年七月歿、年八十七。

福原 公亮

福原 芳山

題馬山陣図

風雪漫々埋陣營。爐辺煖酒且談兵。
一場野睡閑無事。壓盡千軍萬馬声。

○

号水石、政之助子、叔密顧問官、大正十年二月歿、年七十二。奉送松陰先生祇役干東都。

微暖輕寒芳草春。单衣长剑旅裝新。
共上三河梁一分袂去。翠柳垂辺鶯語頻。

通心寺離僧、後松本鼎。称提山。和歌山県知事。貴族院議員。男爵。明治四十年十月歿、年六十九。

卜 居

市遠無三人攪我眠。静聽魚隊躍前川。
一從三江上結居宅。估却青山更買船。

○

元是孤山水雪身。一朝爲我謝三隣响。
慰君知己依然在。明月清風來作隣。

通稱初文仲、後文輔、更に幹。号秋琴。藩医。修史官。元老院議官、男爵。明治二十六年七月歿、年七十。

題馬山陣図

誰識英雄有三遠謀。何將衆寡判三輪輸。
関西蹂躪猿郎略。一蹶馬山三陣図。

金谷菅廟

威德千秋及三萬生。巍然華表表神明。
行人分レ手祠前路。翻想當年遠謫情。

勝間田 稔

佐藤 信寛

寺島 秋介

周布 公平

石井 鼎

小幡 高政

長松 幹

青木 研蔵

一從負笈出郷関。忽々星霜四十年。
誰送微名上三九關。朝來恩命下天辺。
名邦彦、号溪四。藩主侍医。大典医、明治三年九月東京大津波に圧死年五十六。

青木 周蔵

緑連曠野一望茫。掃蕩三春夢一場。
別有行雲流水處。宛然天地大文章。
号琴城

中村 梅處

江天一色雪晴時。夕日沈々萬象奇。
看慣江山渾失却。素屏倒映碧瑠璃。

藤井 勉三

送田中春及帰郷
杜宇声々似促帰。廣陵従レ是故人稀。
蓬窓今夜眠、応レ快。一幅春帆帯レ雨飛。
号聴松。藤井算齋弟。漫遊欧米。広島県令。

第八章 明治初年の詩人

惜 春

園林不復駐春光。閑費吟情懶下床。
惆悵殘紅無覓處。晚風一陣惜餘香。
通称懲輔、一名文之進、名温知。号泉山樵、後神官歿年不祥。

山根 懲輔

臘裏立春

臘裡新陽春暗移。一年併賦兩年詩。
山中曆日梅花在。密雲疎香不説期。

小倉 健作

幼名百合蔵、号鯤堂又劍樂。松島剛蔵の弟、小倉尚蔵の養子。毛利家編輯事務に従ふ。明治二十四年一月歿、年六十一。鯤堂遺稿あり。

塩田 寅助

長添山招魂場
憐レ君一死報天皇。堂々雄豪吞レ虜情。
何啻生前盡忠烈。威靈千載國干城。

落合 濟三

三年不レ上三庚公樓。旅恨依々一布裘。
自愧萍蹤猶作夢。玖珂風雨又中秋。
諱は兼濟、号虚舟。字は君楫、明倫館助教。法制局書記官。明治二十年一月歿、年四十八。

伊勢 煥

巨艦載レ波排三海聲。長風万里氣方豪。
無端身已入三寒帶。月兔北奔南極高。

岡村 圭三

毛利秀包公三百年祭
膽氣堂々幾破レ堅。又看異域敵無前。
驍名不レ独光三青史。血食於レ今三百年。
名は載、号黒城、筌齋。寶齋養嗣。書家。明治四十三年五月歿、年六十五。

中原 静

醉後唵レ詩好摺鞍。衿衣唯恐麦風寒。
倦蝶懶蜂春將レ老。烟畦独有菜花殘。
通称入庵、号静処又梧竹、藩医。明治三年一月歿、年七十二。

宮城 時亮

撫三造新祠一恭祭靈。八頭山上樹青々。
追三恩往事一真如レ夢。杜宇声々不レ耐レ聴。

山縣 篤蔵

越海玄洋万里開。巨鯨跳處雪山頽。
家々頓作三防寒計。一夜驚濤レ撼枕來。

日野 宗春

初名金八、号適所、好古、華嚴山人など。藩世子小姓役。宮内省奉仕。明治三十九年六月歿、年七十。
緒方拙齋先生七十寿賀
本詩略
名は初周平、後宗春、恕助。号鷗洲、白鷗、茶翁、茶狸々。藩医。漢学を太華、稻香に学ぶ。明治四十二年二月歿、年八十三。

粟屋 彦磨

乱峰連亘翠嵐堆。中有三長流二道開。
最是羽衣山半面。依々帯レ笑度レ江來。

渡辺 蒿蔵

号麻石、麻磧。岡本栖雲に学ぶ。広島県庁奉職。明治十九年一月歿、年四十七。
敬老会狂作
今日明倫博物院。日干三羅漢一數十頭。
恰逢此大施餓鬼。極楽往生意氣悠。

二階 道一

在城旬月始帰家。僕童相迎笑語嘩。
時見山窓雪新霽。一痕寒月照梅花。

藤井 戩

七夕後一日送適所帰東京
送レ客潜然涙滿襟。一杯吟酒不レ堪レ斟。
天河今曉分離恨。就與二人間一別思深。

高島 張輔

鐘殘三齋寺一夜方闌。春月蔵レ雲江上櫺。
坐久予知明曉雨。水聲高吼白牛灘。

布施 清介

霖雨山川畫晦濛。誰披三雲霧一仰三晴空。
千秋勲業存三青史。仍想英靈護三日東。
幼名弥五郎、四郎兵衛、号櫻雨。御膳の子。宮内省図書寮出仕。大正七年七月歿、年八十一。

岡 熾

護国香煙
往事茫々去似雲。殉難今尚見三遺勲。
当年諸士多知己。淚洒東山十六墳。

瀬川 雅亮

題老松画
富貴功名何足レ論。吟花嘯月亦君恩。
風光無レ盡乾坤調。人爵不レ如天爵尊。

第九章 明治二十年頃の詩人

春夜観音堂小集

春淺苔籠石磐寒。梅花吹レ雪庄三欄干。

山僧不レ吝林間月。付二與詩人一隨レ意看。

号黄天慢士。萩川島住。遺著明治二十四年六月発刊の和歌俳諧櫻痴一
翔あり。

松上鶴

樹合二晚翠一日維新。枝上初観羽容親。

明治応レ期松鶴寿。賀来四十五年春。

司法官。豊熊養父。大正五年五月歿。年八十。

夏懐旧

懷昔東軍逼二四隅一。勤王何厭作二馳驅一。

炎蒸悪客人間苦。一陣仁風忽得レ蘇。

階前梅花

高捲二春簾一題二小詩一。臥龍梅苑庄二階庭一。

紙窓月落猶微白。認得花兒凝二玉肌一。

宿債不レ知何日休。村二添二鉢意二馳求。

菜畦麦塙春風裡。彷彿多年字鳥遊。

德隣寺十四世住職。号江陽道人。明治二十三年九月歿。年七十四。

恭賦奉忠正公廟下

栽レ花復栽レ柳。建レ祠復建レ堂。

斯地與二斯德一。月長又歳長。

西濱寒瀟

白浪衝レ天鶴影崇。北風凜冽望無窮。

鷄林棘鞆知何処。匹似髯蘇詩句中。

通称少介。名は真威、号奎海。国事に奔走す。後勅選議員。明治三十
八年十一月歿。年七十。

華嚴悲閣

舟繫松江楊柳津。涅槃會近梵鐘頻。

一燈明滅峰嶺頂。知有觀音夜詣人。

名は直記又恒樹と政む、号敬所。赤間宮などの神職。明治四十四年九
月歿。年七十九。

綺羅叢裡弄二烟霞一。

嵐峽東山春可レ誇。

今日曾遊無レ所レ見。滿天風雨旧京城。

名は師郊、通称小七郎。本姓は国重氏、井原氏の嗣となる。後実家に
帰る。

帰松下村口占

天矯二雙龍一自作門。鯉鱗橋甃二別乾坤一。

江山如レ旧人千古。稷々風高村下村。

大正十一年六月歿。年五十六。

毛利秀包三百年祭享祠

當年誰不レ仰二威風一。叱二叱三軍一氣吐レ虹。

透底江家遺鉢在。声名永照二史篇中一。

護國香煙

山開靈域匣禪局。講法時閑日午鈴。

春遊

瘦筇得レ逐二春晴一。古寺門前路縱橫。

楊柳如レ絲花似レ錦。風光滿目惱二吟情一。

志都岐社頭櫻

誰移二指月社辺一裁。應爲レ酬二恩志一未レ灰。

貽蕩春光誇二富貴一。笑迎壯士闕二詩才一。

志都岐社春祭

梅桜千樹社前栽。遊客欣看唱二快哉一。

祠也德馨花也覆。知斯神德與レ花開。

庚寅新年

今朝晨起仰二東天一。雲散風閑曙色鮮。

我亦同レ梅幸無事。又迎明治廿三年。

開基大照院殿二百五十回忌及
殉死八靈譚經拈香

主臣臣節共堅。流芳二百五十年。

仁恩義德將何報。開設無レ遮大法筵。

二十二世大照院住職。明治三十九年五月歿。對晴樓詩鈔若溪遺稿集あ
り。

教育家。

上野春月

羽衣山上月朦朧。一刻千金在二此中一。

三十六街人定後。堤桜花底立二春風一。

号茗里

号春及。

戊子初夏病中作

水村山郭緑陰繁。葉餌相親不レ出レ門。

擬下排二病魔一保中天性上。浩然正氣滿二乾坤一。

教育家。清佐父。号扇洲。

樺太行節録

自嘲八十老書生。行李蕭々軟脚輕。

願補二史傳一酬二宿志一。筆端載レ夢入二雲程一。

春日遊志都岐公園

本詩略

春郊

連日堅晴雲豔霞。東阡南陌數株花。

十分春色滿郊趣。行客移レ情欲レ止レ車。

春日漫詠

四野暖和殘雪空。遲々老杖醉二春風一。

百花時節無二詩句一。鶯語呼成喬木中。

早春作

抛二擲塵營一任二自然一。妬辺又手闕二詩編一。

吾家得意閑二富貴一。園有二梅花一與レ水僊。

春日偶成

黃鸞嘲々弄二春光一。花滿二山林一草滿レ塘。

田總百山養父、庶民教育家

兼常 吉勝

村田峯次郎

原 榮治

三浦 澄彦

弘 詠蔵

田總 稔一

安間 正寛

中島善太郎

繁澤 於菟

金山 桐窓

有田 聴秋

南方 惠繁

八谷 清

齋藤 禎三

徐步吟遊入佳境。 萬紅千紫十分香。

春遊

花滿園林春色著。 鶯兒得意鳴烟霞。
吟行盡日西郊路。 又叩詩囊一訪酒家。

春日山居

樓閣春夢曉清閑。 一抹烟霞外山。
認得流澌寒力緩。 瀑泉聲激碧溪間。

春日偶成

無名草木惱情花。 有種麗禽稱意譚。
莫笑醉來眠隨處。 山区水次亦吾家。

春日書懷

本詩略

春日遊上野公園

千門萬戶太平時。 尋句把盃臨綠池。
園裡漸看春意動。 黃鸝誠語柳懸絲。

庚寅早春作

池面水融風色新。 十年初遇靜中春。
黃鸝相語梅花笑。 共是書窗第一賓。

過古戰場

陰風捲地日光寒。 回憶當年一萬感。
將卒從來無異種。 血痕齊化草漫。

川上村探梅歸途作

本詩略

第十章 大正以後の詩人

中村 正路

養 蚕

營々蚕事本初成。 亦是村民報國誠。
瑞穂洲中新富策。 西人解否扶桑名。
号致堂。 県會議員。 産業發達に努む。 昭和五年四月歿、年七十四。

原田 貞男

從昔人生有屈伸。 一朝陰雨若輕塵。
精神到處通金石。 養得丹誠應待春。
大正癸亥六月上院萩町會議員選舉後書感
謹呈 山本國手 七十有六翁三松菴貞男
儒者。

弔長宗翁

落苦滿地跡凄然。 劇々鳥悲七七年。
豈悼人生如一夢。 蕪詩爲賦供靈前。
寄第三回函信會

卜部 實三

法縁遠近結盟來。 豈但春秋酒宴催。
追德温交函信會。 同同志業計良媒。
常念寺住職。 号は盧嶽、後八江小隱といひ、下関移住後は主として徳
林小樵と稱し、三去堂、殘拙ともいふ。 昭和五年三月歿、年五十七。

藤井 赫然

獨逃三幽谷一発三清芬。 吾愛高風一迎入盆。
宿志在三山林一未遂。 紅塵場裏只談君。

張 忠一

瓶梅蕾未破。 新歲少春光。
試筆催欣意。 紅花墨氣香。

安藤 紀一

此是先生所贈松。 門君庭裏翠光濃。
猶餘當日威容存。 樹勢屈蟠如老龍。
号北海。 良台次男。 地質學者。 画家。 昭和六年一月歿、年八十三。

高島 得三

松林 篤

石光松之助

香川 政一

室田 習三

碓井 樗堂

田中 義一

門田 豊熊

伊藤作太郎

石田 為邦

榮 宏存

杉 相次郎

中村 一實

内藤 廉

伊藤 信亮

白上雅之進

江原 善槌

宗像 傳吉

藤井 義一

山縣 俊三

徐步吟遊入佳境。 萬紅千紫十分香。

春遊

花滿園林春色著。 鶯兒得意鳴烟霞。
吟行盡日西郊路。 又叩詩囊一訪酒家。

春日山居

樓閣春夢曉清閑。 一抹烟霞外山。
認得流澌寒力緩。 瀑泉聲激碧溪間。

春日偶成

無名草木惱情花。 有種麗禽稱意譚。
莫笑醉來眠隨處。 山区水次亦吾家。

春日書懷

本詩略

春日遊上野公園

千門萬戶太平時。 尋句把盃臨綠池。
園裡漸看春意動。 黃鸝誠語柳懸絲。

庚寅早春作

池面水融風色新。 十年初遇靜中春。
黃鸝相語梅花笑。 共是書窗第一賓。

過古戰場

諱は承秀。大照院二十四世住職。昭和十二年十二月歿、年六十九。

長門峽籠居

夜長深院斷無_レ人。默坐修_レ養_二我真_一。

霧月光風心若_レ水。秋空萬里絶_二纖塵_一。

陸軍少将。号大淵。昭和九年三月十五日歿、年六十三。

釣_レ月耕_レ雲八八年。金剛正體洞曹禪。

相思去歲新臨日。玉貌麗誰知_二化遷_一。

海潮寺住職。明治八年生、健在。

建塔遺誌

五十九年夏。清高巧現_レ真。

無常何日是。獨塔下成_レ塵。

維時昭和五年夏五月老衲自建設納骨塔詠

長藏寺住職。昭和八年九月歿、年六十四。

弔亡友香川君

多年教學見_二殊勲_一。史實精研又有_レ君。

何料一朝天奪_レ壽。使_二吾變淚濺_二遺文_一。

明治十年二月生、健在。

錦帶橋

星霜二百有餘歲。嘖嘖声名冠海東。

未看奇才題柱句。堪_レ誇英主濟川功。

氣晴紅霞猶_レ浮_レ水。雲斂蛟龍却躍空。

行客過之驚眼眩。神機豈讓_二魯般工_一。

教育家。郷土史家。明治十八年一月生。健在。

大照院梅花

巍然古剎庭。鉄幹著_二梅花_一。

魚板揺_レ山響。清香動又加。

昭和丁酉元旦

臘尾春頭隔_レ夜廻。此生一夢去無_レ來。

暗香遠動歸_二何處_一。今日殘花昨日開。

陸軍中將。昭和三十四年七月歿、年八十四。

元旦

身潛_二濁淵_一歷_二幾春_一。春回處、早梅新。

曉天依_レ旧東風靜。海不_レ揚_レ波湧_二日輪_一。

長藏寺住職。明治三十八年三月生、健在。

偶成

綾羅錦繡手珊瑚。大厦高樓盛饌娛。

白日誰知怒雷走。安眠徒食_二三天誅_一。

亨德寺住職。明治二十二年生、健在。

浮沈八十八回春。朗詠郵信旧友親。

孤屋寂寥無_二賀客_一。陶然椒酒壽_二良辰_一。

陸軍将校。八十八歳、健在。

寄_二萩文化_一

江山夢逐幾春秋。書劍縱橫策_二國猷_一。

三百年來文化跡。地靈人傑是長州。

号椿水。福本百合熊長男。郷土史家。神戸商工会議所理事長。明治二

櫻井 哲郎

福田 彦助

清水 宗潤

阿武 雪童

常川 光治郎

福本 義亮

妙圓寺月性

廣瀬 旭莊

原 采菡

大德寺大綱

僧 黙 霖

庄原 篁墩

十年生。健在。著述多。

賀張紫村翁八十誕辰

文墨風流別有_レ天。棄_二拋名利_一付_二雲煙_一。

斯翁最羨天恩渥。福寿康寧得_二兩全_一。

教育家、郷土史家、健在、明治三十一年五月生。

第十一章 萩來遊の詩人

與 人

手弄_二數珠_一十二時。傾心願海又奚疑。

有_レ人若問_二後生處_一。四程蓮開八德池。

号古香。真宗の学僧。明和頃蓮生寺に留錫。安永七年正月歿、年七十六。

首 途

客路天涯自有_レ通。浮雲流水思何窮。

東西南北踪跡無。日夜飄蓬只任_レ風。

長府の人。文政九年來萩。

玉江賞月

月出_二東山_一一軒_二斗牛_一。繁絃急管幾闌秋。

前灘歌湧金波碎。人在_二玉江第一樓_一。

筑前秋月の人。文政十年來萩

萩坪井邸作

欲_二下向_二天涯_一一試_二中一揮_一上。風雪生處客魂飛。

八江昨夜傳_二春信_一。逢_二着佳人_一得_レ意歸。

京都の人。安政三年來萩。安政六年六月獄死。

松本 二郎

教 遵

田上 菊舎

原 古處

梅田 雲濱

輓 遊木生

審夷航_レ海計何長。事覺幽因病且亡。

知汝憤魂眠不_レ得。騎_レ鯨飛渡大東洋。

防州遠崎の人。安政五年來萩。同年五月歿。

遊 鶴 江

春松影裏水禽啼。晒網漁窓夕日低。

数畝山田依_二海浜_一。乱橋林立菜花西。

豊前の人。安政五年來萩。

富 士 山

富嶽千秋雪。单身萬里程。

非_レ無東道人。秀色日相迎。

筑前秋月の人。古處の娘。安政六年來萩。

丁丑初秋送坪井婦長門

婦舟明月泛_二秋波_一。鴨水江頭聽_二棹歌_一。

可_レ識吟魂從_レ君去。長門誠認故人多。

京都大徳寺住職。本名紫野大綱宗彦。

追懷坂井虎山翁

早上_二文壇_一絶_二匹儔_一。堂_レ赤幟樹_二來秋_一。

胸間廣大容_二天地_一。筆力翻凌_二六十州_一。

広島の人。本名字都宮真名介。黙霖の他梅溪、雪溪等の号あり。安政二年同三年來萩。明治三十年歿、年七十四。

曉遊南明寺賞桜花

峯頭殘霧曉朦朧。花氣吹來色是空。

紅日一輪輾_レ波出。梵天樓閣五雲中。

大德寺大綱

僧 黙 霖

庄原 篁墩

原 采菡

梅田 雲濱

田上 菊舎

松本 二郎

教 遵

田上 菊舎

原 古處

梅田 雲濱

輓 遊木生

富 士 山

富嶽千秋雪

非_レ無東道人

筑前秋月の人

丁丑初秋送坪井婦長門

婦舟明月泛_二秋波_一

可_レ識吟魂從_レ君去

京都大徳寺住職

追懷坂井虎山翁

早上_二文壇_一絶_二匹儔_一

胸間廣大容_二天地_一

広島の人

曉遊南明寺賞桜花

峯頭殘霧曉朦朧

紅日一輪輾_レ波出

名は懿。通称文助。号篁墩。徳山の士、文久元年十月歿、年五十三。著書篁墩詩抄。

船中望小倉憶谷潜蔵

日柳 燕石

小倉城外想二当年一。四十八桜一炬煙。

立倚三舷頭二子細望。故人戰處是何辺。

讃岐の俠豪。号は燕石、柳東など十六種に及ぶ。

大洲 鉄然

大島郡久賀覺法寺住職。号九香。明治十六年巴城翠樹園にて書ける詩書あり。

長 三洲

玉江秋月

昨賞賞レ月玉江秋。調詠声清袁氏舟。

一樣西風興不レ倦。又追三瘦亮一上三南楼一。

名は英、通称富太郎、後光太郎、豊前彦山の人。明倫館講師、明治二十八年三月歿、年六十三。

高橋多一郎

至評定所途中作

身處二危難一殆廿年。孤忠自信付三蒼天一。

国家傾覆無二人怪一。依レ旧又見蔽レ日烟。

因州の人、澤卿に従い大井村に滞留、大阪天王寺にて自刃。号愛諸。

桂 天香

中津江夜雨

日暮怪雲江上横。悲風吹レ雨暗愁生。

客心一夜眠難レ就。聽盡蕭々打隔声。

昭和丁卯初冬偶下阿武川遊菽九華山本國手以有旧交周旋懇致驅車而廻覽菽新八景乃次原欽韻賦此寄以乞政と題する詩作あり、著書に笠檐餘瀝、長府史詩あり。長府の人。昭和十二年歿、年八十七。

犬養 木堂

一見心原断三百憂一。益知身世兩悠悠。

江亭獨倚欄干處。人亦無言水自流。

山本君鑒 木堂毅 書

大正十五年六月、高橋前政支会総裁、田中新政支会総裁と共に来萩。

欲下為二邦家一立中長計上。四旬論戰逐三炎塵一。

幸逢三兩院諒二吾意一。今夜南窓夢始新。

二十六線路通過議会议喜 國東

大正十年十月来萩。

第十二章 阿武郡須佐の詩人

品川 希明

号は勿所又は鶴洲。須佐の人。生命を以て十一歳に來つて学ぶ。懨敏超凡。後京都伊藤東涯の門に入り、帰つて初代育英館学頭となる。

元文三年八月歿、年五十一。

波多 守節

通称與一、号北固、須佐の人。山縣周南に師事。宝曆五年四月歿、年三十。北固文集あり。

波田 兼虎

通称熊介、号嵩山。守節の弟。山根華陽に師事。二代育英館学頭。天明五年四月歿、年五十一。嵩山文集あり。

山科 真通

号太室。三代育英館学頭。寛政九年正月歿、年五十一。

小國 融

紫築城頭碧海廻。松門曉弘三彩雲開。

東風吹送雙飛鶴。先自二三山一獻レ寿來。

通称融蔵。号は船石又は玉淵。筑前の龜井南冥に学び、後上京して皆川淇園に從学す。四代育英館学頭。文政十三年歿、年六十二。船石集二卷あり。

小國 融蔵

名武彝、号は嵩陽又は豊所。五代育英館学頭。慶応元年五月歿、年四十二。著書紫廼夕煙。

大谷 實徳

對月有感

跼レ天踞レ地已周星。馭二賊禁門一遂見レ血。

一片冰心萬死身。旧知只有三故山月一。

通称初め茂樹後撲助。号雪溪又梅窓。小國融蔵吉田松陰に学ぶ。慶応元年三月自刃、年二十八。

佐々木貞介

船木長谷川氏席上

家傳奇秘葉。山造自然庭。

高臥枕三雲石一。松風好解レ醒。

名は毅、後に貞介、初名萩野隼太。号松墩。明倫館教授、後山口師範学校教授。明治十八年三月歿、年五十一。著書松墩遺稿。

吉賀恒太郎

元旦所感

悠久二千六百年。無窮皇統愈連綿。

享二生此土二蒼民幸。遙拜宮城東海天。

陸軍将校。元須佐町長。号長北。

春 雨

水満三池塘二穀雨天。杏花委レ地転凄然。

朝来細々無三雨声一。半作春郊一抹烟。

名は喬定、号煤坡。儒者。須佐の人。明治に入り東京にて家塾を開く煤坡遺稿、松風窩詩鈔等あり。

仁保 久昂

大審院判事

増野 喬定

第 二 部

萩 庶 民 文 学

第一篇

1、元文五年萩に於ける落書

余は昭和十四年秋、毛利藩士島尾家の古文書を手に入れたが、その内に元文五庚申年落書と標題した次のものがあつた。当時の人物寸評で面白いので採録する。

- しだいに大きくなるもの
- 竹の子と毛り大蔵
- よささうでようないもの
- 江戸白魚と毛り筑後
- かさだつて直のないもの
- 三月かぶと堅田安房
- いつ見てもけぶたいもの
- 瓦釜の口と山内縫殿
- 座をふたげて役に立たぬもの
- 火のない火鉢と粟屋勘兵衛
- きつと見えてもめたもの
- ち肩衣と山縣藤助
- 見掛よりようないもの
- 店の羊羹と榎崎六左衛門

- 丸で役に立たぬもの
- どんぐりと山縣市左衛門
- 付いて廻るもの
- きち引のろくろと三戸与左衛門
- 有りふれても似ぬもの
- かは女房と和智九郎左衛門
- 古くて遣先のないもの
- 御拔と石川弥左衛門
- 骨らしうてあちないもの
- めばると宇野与一左衛門
- めつたと口をたたくもの
- 与二郎と長沼九郎左衛門
- 見掛よりも丈夫なもの
- 檜のづぬけと嶋尾兵左衛門
- 能座でおりふし見ゆるもの
- 見物所の小使と田坂半左衛門
- めつたとはたらくもの
- 旅芝居の役者と坂九郎左衛門
- どこでも身を持つもの
- 山がらと羽仁五郎左衛門
- どうでも役に立たぬもの
- 祭過ぎての新ずしと赤川又左衛門
- つまらぬもの
- はま崎のくわんぬきと物頭の寄合

語釈 もち肩衣は麻絲を振ちて製したるもの、きし引は木地の挽物細工、与二郎は京都にて乞食の称。

附記 本文中難読難解の所、仮名遣いの誤謬、及語釈は萩中学校教頭金子乙助先生のお氣付により訂正追加したものである。

ロ、文政二年頃の萩の落首

両国は富と芝居の芥子あい

馬鹿辛ふ(家老)て舌(下)が溜らぬ

富は富札のこと。当時は新堀に相場所があり、弘法寺に芝居固屋があった。

ハ、巴城士族行

萩の士族のありさまを、たとへていはば暮にすむ、燕の如きなきけなり。其故よしを尋ねれば、二百年來藩政の、時には治にも乱をとて武具馬具常に揃へ置き、武芸たしなみもろこしの、ふみ迄よみて奉公の、道を忘れずおきふしに、行規正敷かどみがき、農工商の其上に、立つべき程の心もつ、其本なにか儉約を、勤るよりの外はなし。そこで衣服も惣木綿、足袋さへ月に限りあり、遊芸音曲其外の、無益の事は皆法度、嚴敷君の教へなり。勤王正義を貫きて、廃藩置県の其日か、何も氣儘の事となり、珍らしそうに出立を、見れば男女の隔てなく、上から下へ絹かさね、こうむり傘に江戸下駄や、金銀くさりの時計下げ、帽子や首巻取揃へ、芝居淨瑠璃輕業や、じみなる分は碁に将

第二篇 雜 俳

イ、前 書

著者はここに前書をいれるつもりで、原稿用紙一枚を空白のまま残されていたが、目的を果さないうちに急逝したので、本文を欠いている。(編者記)

ロ、小畑觀世音奉納(抜録)

聴 松 庵(雲鯨)評

から／＼と朝花鳥
から／＼と

雑煮にみなが揃ふ目出たさ

冠

村雲に走るやうなり冬の月

長折

よい処子供来い／＼ころよく

今からの八里は
はった道ながら

暮る目につく十五夜の月

覗いては行

沢山に竹の子生へて下屋敷

クツ

よい月夜／＼とて端居哉

冠

鳴く鳥の木の間隠れや春の雨

耻かしいこと

手習を日々はげます親心

クツ

ぶら／＼と月の繩手を風涼し

平折

散松葉蚊遣にたくか磯の家

棋、間には煮売屋料理茶屋、もとのありさま打忘れ、其入用は何をも

て、公債証書を質に入れ、利息の高下に論はなし、芝甌が来ると其日から、棧敷はつみて木戸をとめ、右往左往に立ちつどひ、もみてもみ合立帰り、問ひつ答へつ芝居談、聞くも氣の毒腹も立つ、此つ、もりはいかにせん、書入置し公債証、約束期限が迫り来て、返す手立のなき上は、流質物と究りて、名前替との其願、書くも難義の涙なり。節季がくれど餅米の、段ではなくて明暮の、飯料のあても届兼、種々と思案をめぐらせど、父祖重代の武具馬具は、頓と以前に売払い、その跡かたもなかりけり、沢瀉御紋の帷子も、質屋の二階に舞上り、また恐ろ敷掛乞は、酒屋肴屋呉服屋に、浮き借処々の知音先き、あれもこれもと攻めれば、大敵恐れぬ武士も、生た心地はなかりけり。簡様申せば悪口の、様にも聞へ申さんが、七年前の年の暮、かく成行きてはならぬぞと、今より歯をば喰しはり、芝居をやめてもらいたい。会社を結び心きめ、うかうか浮利を追はずして、質素儉約古き世の、教を守り失はず、養蚕製糸のその業を、教へてもらひ引立て、嫁も娘も打つどひ、こがひ仕事に身をやつし、亭主は朝も早く出、葉桑枝桑荷ひつ、行きこう道も競ひあひ、簡様辛抱するからは、所帯はひびに立直り、子供の教も行届き、もとの士族の其腹も、続いて持て品行は、正敷人に尊とまれ、目出度御代の太平に、孫も彦孫も榮へたり。

附記

本書は東京吉田庫三家及び長府乃木家にて発見せるもので、明治十三年一月頃杉民治翁が時代諷刺を露骨に読み込み、松本橋附近その他要所に撤き、または知人に配ばられたものと思われる。萩文化第三卷十一号、同第四卷四号参照。

覗いては行

ぶら／＼と祭の宵を千鳥足

から／＼と朝花鳥
から／＼と

日和見立て戻りお百度

同

船が戻ればせりがはじまる

平折

海山を楽に見歩行二月哉

浦が賑やか
里も賑やか

七夕の祭りに続く盆踊り

思ふ処へ

留守番に拾ふて置いた酒肴

事さへあれば
尻をからげる

方丈のお氣に叶ふた江戸男

冠

村雲に折々来たる時雨哉

思ふ処へ

散浪をかくぐるなり磯千鳥

耻かしいこと

我儘に躰と親の名迄出る

今からの八里は
はった道ながら

はた給るも家の面目

大竹を別た
やうなる心ぞや
くつ

事のわかったおかたではあり

のぞいても
ふら／＼

極楽といふて這入や蚊屋の月

今からの

年礼もはかどる町の軒続き

思ふ処へ

里へ知らせも嫁の安産

冠

つれ／＼にさらへる三昧の後や先

事さへあれば

夕暮は昼の暑さの噂さかな

いつ迄も在所の癖が捨り兼

大竹をわけた
やうなる心ぞや
浦が賑か
里も賑か
追加
世のよさを諷ひなまめく人ごころ
石垣や此観音風涼し

初鷹や心よげなる神つ風
雲鯨は大野泰二、別号篁庵。嘉永六年五月歿。
雲 鯨

ハ、椿八幡社奉納
ハギ六花園(山根素全)評

はいかい弓矢の守
四方も静かに君が代の春
夜桜を奪ふ廓のうでくらべ
夢にも 夢想からはやり続きの石地藏
大かたは 明りに盗む名月の芋
くつ 寒柳や雫に濡るる鳥一羽
勺 朝起の種を貰ひし菊の苗
富士は 蕎麦売の声に追はれて戻りけり
長々と 榎火取巻く庚申の宵
大かた 粹な捌の姉を立もの
沓 花咲く比を見に庵の客
諸願 泰平を諷ふ御代迄神の徳
何も いさかきも丸ふ治める天憲役
露竹 貞露
五調 松窓
二松 松窓
笑松 松窓
今女 松窓
春日 松窓
二松 松窓
松窓 松窓
笑松 松窓

天地 霜の夜や旅の子思ふ親心
長々と ひまを貰ふてたまの敷入
天地 白梅や甲斐なく更る月の色
平折 幾里は笛の音もあり夏の月
爰にも 猿の子の大根あらず山の畑
天地 しら萩や咲き添て散る水の上
沓 隣りどし隔ぬ桃や垣一重
沓も 吉野山一重にたらぬ桜時
宵今は 窓しめて聞雨寂し鹿の声
諸願 照り輝く旭清くも御広前
巻軸 追加
手作り酒聞き初めや後の月
松窓

ニ、春日社奉納(抜録)
萩以竹園評

折 寛から涼しき水や秋の夜
くつ さらさらと星は光りて霜夜哉
行つ戻つ 貫ひ乳の子よりも結局つらい母
雨雲はさらりくと 願ひい糸の届く七夕
晴れてよい日和 北門

ホ、金谷天満宮
はい 朝清め(抜録)隠之軒評

最鶯のこゑも折々
年よりの世にもそろ／＼成りそふな
頭巾をばぬいで隠居の日向ぼこ
明けたればちつくり雪もゆるぎかけ
御隠居も御下輔の道が明き
眠い気をそそぐ心の池清き
むすぶ手水に旭のうら／＼と
佗言もない程の無沙汰
お祭りの序に年の礼を兼ね
俗の名で尋ね困った柴の庵
おみやげの品はわづかの早松茸
安産も知らず雛の気も付ず
跡を考先をかながへ
嘘らしい事で八卦も捨られず
こわい事なければど恋のふるひぐせ
縁に付く迄はいとまも願はれず
腹立も知らぬ稚の這ひかゝり
ほんやりと片頬笑ひに立て行く
酒の過ると兎角くりごと
誰が言はした孫の悪口
古竹 南湖 集加
味風 椿町 花松連
曲事 蘭舎
明木

長折 又壺つ力む角力の囁と晴れ
雨雲はさらりと 晴れてよい日和
折 片蔭で好な遊びや川涼し
同 かき寄て砂を見にけり貝拾ふ
くつ 富士は日のさして裾野は時雨哉
是は妙なり 酒中花に又一盃の吞ごころ
帆かたけ船は 腰かけてすゞし露台の朝気色
沖中をゆく 柴蒔たやうに見へけり沖の舟
沓 霜月のなぎ 東西を蚤く角力の囁勝負
同 ばらと／＼と 山々に風色調ぶ若葉かな
折 山々に風色調ぶ若葉かな
沓 山道や時雨は晴れて六地藏
折 水鳥の遊び見て居る橋の上
霜月のなぎ てん屋の軒に捨るわらんじ
馬駕籠にいつも 通りのたへもなし
追加
和らかや四海の浪も幣の風
以竹園

わけある中も知って仲人
しろ／＼と咲垣の夕顔
湯上りもにくふない程薄化粧
湯殿からすぐ椽先へたばこ盆
もの言ぬ中美しおもひやり
さう聞分けが付ばうれしい
戻るとも一応親の顔も立て
嫁入のが孝行ならばどふなりと
身を捨て又身を浮せ親のため
膝もんで見つ頭撫て見つ
今日も／＼船にゆられて風をまつ
面白いは恋句の付所
問へば呵られ問んねばよめぬ経
国々の自慢咄も長あくび
長々とかたい咄しのしゆふと殿
中々に秋の夕暮ではあるに
すがる柱にはだのひんやり
障子明れば落る桐の葉
まだ山なれぬ児のうつとり
くさめに鳴のついと立ち行
嫁に取る人身は内にあるけれど
逢せたい夜にはあなたは間違て
喰ひなれぬ蕨の味を喰覚
応も聲の上のたしなみ

茂友

川添

古軒連

古陽軒

剃てから結句身持がむつかしい
若庄屋ながら今世の小松殿
日増年増ふへる身代
あの子さへ合点したらば嫁らせふ
世の沙汰も孝行人といふ事じや
是申これ／＼申言申
いつ戻ても済んだからかさ
旅籠でなりと木賃なりとも
のれんぎわから招く古手屋
損はゆくとも朝の門出
包忘れてあのお飛脚は
扱降雪のたら／＼、
お住持も算用違ふ御法談
鉢の木を焚てもてなす行脚僧
鯉や鯉ふぐ／＼とふれて来る
常に口きく程の働
押懸の客へもやはり御本膳
小家村にぼちと新に蔵普請
白雨に繩手を走る傘木履
此形のままに心の池の影
冠

五間町

柳葉
御許町

朝白に新らしふ夜も明けはなれ

平一軒

涼しさや浮草の花動きあひ

折 ススリ、シンシ

相撲とる相撲より見人の力身かな
桃咲て娘を母の自慢かな

長折 カナヤシロ、コ、ロノイケ

ころ／＼ころり葉に露の芋島

心ころりに楽しみの池ぞ池

かびの花やっぱり入梅や塩庭

沓

此祖父もちと踊りたい夏の月
荒庭の中にも薫る寒の梅
隣からさすって見たり種瓢へ

へ、山本九華堂所蔵雑俳の短冊

沓 風や急度こたゆる竹林

まった暫しと胸に思案手

はやり男も堪恋の二字思ひ出し

クツ 梅が香の通ふ溪間や清き水

五米庵選

二折 時雨や露に紅葉する山

許藏六仙

葉蓬仙選 裏花山(中原国輔)

蓬萊堂 評 ウラ白我

菊見月とて菊の花咲 神酒徳へ露折かぎすけふの囁

二、三日逢ふてはとふが床しふて 龍山子 点 裏御許町友兒

日増夜増宗門のはへ 再建の木々も山ほど積かさね 鬚翼のまくら双ぶ陸言

唐も日本も／＼ 善悪の鏡は一つ裏面 方五斎(雨調) 評

小倉 うかれ立行も帰るも花の酔 芳州 点 裏 之

山里鰯一枚歳用意 浮橋 評

笠 夏菊や葉ほど降る朝の雨 潜竜子(雨調) 評

前頭 柀は花にやさしきさかりかな 小洞庵 撰

笠 奥深き岩もる水や苔の花 如竹庵 点

清めほどハラ／＼と時雨の 帯目を附て御幸の御待して 蓬水 評

何の遠慮の有るものじやない 藪入の潜上いふも親のうち 葛軒 点

長折 昨日やけふの暑かな 月雪花 桃里園 点

しら雲の高ね／＼をうち靡き 御遊を祝ふの詠歌 木夷庵 評 裏蒼茂

六花園 撰

しやう事なしに／＼しやうこと 五人めはこたつ隅へひさまつき

丘花撰

沓 露のぼる稲の色なる朝けしき

画竹庵撰

六々 初秋と名のり涼しく思ひけり

露宙庵点

ウラ月雪花

アレ仰山なく、祭礼に曳出す山の作り花

瓢庵点

又も鏡に向ふ面捜 君ゆへに心尽して身つくろふ

三疎園考 裏女香菊

沓 磯松も眠る姿や朧月

閑月亭評

笠 鹿啼やさひしさまさるうき旅寐

柳庵点

折 夜も今ぞ花も盛りに脊戸の庭

県括園評 ウラ伏乞

いい出し兼て口をむり／＼ 一枝ももらひ兼たる庭の花

夕庵点 奈古琴浦

夕月や秋とは更におもはれず

夕庵点

しくるるや骨まで濡るる浜伝ひ

裏梅琴 夕庵評

裏梅琴寺子供又隙願ふ日永かな

裏ナゴ 思一 夕庵点

糸薄はけりて秋の姿かな

裏ナゴ 枝一 夕庵点

御辞退の有ふことではなけれども 渡し兼ての恋のかけ橋

繁軒点

さくら／＼と桜最中 麗な娘に流行釣瓶すし

裏 雲標屋

うつつじや／＼夢のうつつじや 伯良のころを奪ふ舞の妙

暮軒点

日毎／＼に聴る参詣 柏手の音も留の山社

天真齋選 裏谷桜

初暦や有り合ふ人の声に声

葉爾坊撰

中むつましふ遊ぶ子供よ 賑やかに花もちられ離座敷

露宙庵点

さも清浄に香花燈明 心変 身にもしらるる 山

朝陽園点

小倉 もろともにいさ見に行ん花盛り

以竹庵考

長折 風にみだれ野辺の薄の露寒き

蘆軒点

平折 日／＼にととなふ色や野の錦

桑樹庵点

第三篇 狂歌師

イ、内藤白露園

白露園は長州藩士にして世々毛利公に仕ふ。湯淺仁兵衛の二男として長門萩に生れ、内藤氏を嗣ぐ。母は植木平之允の女なり。通稱清兵衛、諱を信敏後に友満と改む。資性豊敏にして深く文武両道に通ず、明倫館に在りて時の名流儒家を師とし和漢の書を學びつつ、仏典を修め、且つ稗官野乘の類、窺はざるものなく、殊に狂歌狂文等當意即妙其頓才は時人を驚かしたること幾度なるかを知らず。慶応二年十二月歿、享年六十五、平安古安養寺に葬る。

白露園は幾回となく江戸に勤役し、諸方の名家を歴訪する他、六樹園石川雅望の門を叩き、親炙して遂に白露園の雅號を受くるに至れり白露園の住宅は萩中の倉の通稱内藤の浴に在り。嘗て前小畑赤坂の射撃場より彼の庭上に誤って「ボンペン」砲の彈丸飛來せることあり、別に怪我人はなかりしも、家人の驚怖甚しかりしかば即座に狼籍のその仕返しにも内輪には

筒が(恙)なき故打たで(歌で)濟ませる
或時藩主より「石三味線」と題し、詠歌を徵せられたれば、即座に石の三味葛の葛の糸かけて

秋風吹けば葉はちりつてん
殿中に硯あり、縁の一方に牛を刻し、他方に魚を刻しあるも、そのわけを知るもの更になし、藩公清兵衛の出仕せる時、尋ねられたるに答

えて

これは一方は薄い(牛)墨、他方は濃い(鯉)墨をするものなるべし

ある時一書生来りて、この本箱の蓋に一首願いたしと申したれば、『書物は常に閲讀すれば虫の喰ふ思ひなし、若しまたありとすれば、みる(虫を除くに効ある海草)を用ゆるをよし』と云いて

書入る、箱のお中(お腹)の虫気には
みる(見る) (海草)より他の薬やはある
孔明彈琴の圖に面贊を頼まれて

瓜かけて弾く孔明が琴のねに
詰めかけて退く仲達が兵
梅花と鮫鱈汁が名物なる東海道梅澤の宿にて
駕籠の戸を明くれば夜の梅澤や

花は見へねど暗香(鮫鱈)はあり
或る友の饗応を受し時、主人曰く、この汁椀に体を入れあるや判らねど、蓋を取上げられたるとき即吟を賜はり度しと。彼快諾して蓋を取上げしに、汁の中に豆腐ありて上に海苔をふりかけたり。昔の禁裡詞に豆腐を「おかべ」と云いしかば須磨の浦忠度の故事を思い浮べて

蓋とりて見ねば心がすまの浦
おかべ(岡部)は下にただ海苔(忠度)は上

ロ、毛利齋元等の狂歌

貞操院

黒駒をかけて出したる餅なれば

食う人々荒馬という

俳優と雪月花の見立三美人の画に

毛利 齊元

すすしさを岩井の水に影うつす

柳の髪に月のさし櫛

おかげ参りの図に題す

毛利 齊元

有難きお影にあいの山まゆも

うす紫に霞む江戸楼

狂歌雅号に柳櫻亭又は柳櫻齋江戸の花成と云うあり。

明倫新館の南門に張られたる紙(南門で仰山とよみ叱られた)

を見て 村田 清風

俟約をするも事にぞよりぬべし

国家の大事思いたまへや

ハ、狂歌五言集という誌上にナガトと肩書

ある十五名の内萩の人と思はるゝ者左

の四名あり

橘に似れども籠の竹内の

みかんは国の紀氏奉るらん

白露園

遍照が馬の疵につぬらし

金箔色に咲く女郎花

志遠里

多きには品も少しものいはぬ

山吹の花いかで実のなき

厚丸

こもりくの初瀬の方につく鐘は

あの山越えて里に聞ゆる

對亭 川成

ニ、山海集中の狂歌

天保九年弥生の頃発刊された狂歌正流山海集中、萩と思われる人の歌を左に掲げる。題は春の魚と春の鳥である。撰者は金鳥園と新柳園である。

竜宮南殿あたり曳く網に

かゝる左近のさくらてふ鯛

六梁園清水

滝川やさかまく水のしら玉に

ぬけるは春の柳葉の鮎

三五樓道樽

数つもある雪の白魚一むれに

川の松藻し枝もたわみつ

白樫園芳風

親をこふを声たえまなき燕の

巢ぞあながまといふべかりける

對亭 川成

この豊作の麦わらの鯛

網に入る雪の白魚家根舟の

秋草園

簾かかげて見る妹もあり

とれる時鯛の四ツ手につぐ竹も

玉珠園厚丸

よほどたわめし雪の白魚

孔明がはかりごとひく鳥の音を

千尋

うそとさとりしわが国の人

蛙面水

神代の歌にやあらん鶯の

数もそろはぬささ啗の声

躬 杉

秋来べきしるしを砂にかき分て

飛ぶは形見の浦のかりがね

和田 澄

篋のうちふり出し鶯は

かの字尽しの歌やよむらん

村 咲

妻や子をたづね近江の君ならで

舌とき声にきぎすなくなり

長 樹

ホ、三浦半島沿岸守備の際毛利家讃歎の

狂歌

随一に惜しや三浦のおもたかく

もうりの見ゆるかついろの紋

へ、黄島集中(明治二十三年四月出版)

にある狂歌師

此摺物の絵を見はべりて

魂返す香がたばこの煙にも花の顔せあらはれはれてけり

守る人にあらぬものから花に手をうちてとめたる足栖の関

本名 中小路 融

八十九叟 栗下軒貞郭

香に匂ふはなの下にて吸う煙草風は無用とけぶりことぶく

流れ波む大目くくの千祖ぢやと贅三百の年忌とむらい

本名 門田 句馬

錦花園 萩の光

我園を逃さじものとはな鳥の霞のあみをはるは長閑けし

同 人

人磨も赤人もありひなの壇人にや立てん下にや立てん

同 人

限りなき楽しきやこれ打なびく霞に酔ふてあそぶ春の野

同 人

永き日をふるの市へに垂こめて人もこぬかの雨ぞ淋しき

同 人

指伐らば剪よ手折らんこの花の歌は血留めの難波野の梅

同 人

千金のはるかぜふけば老厘の銭ももねをもつ軒の風鈴

同 人

時は今開けゆく世の智慧袋はころぶ梅のはなにつけても

同 人

治れる世にもはな見る手弱女は陣取めきて暮をはる野

同 人

改正の土地丈量にうちわたすさほのかわべに青柳のいと

同 人

達摩本本来空にあがるなり西よりきたる風にまかして

同 人

待花

菊酒舎 真垣

まち遠き山の花ともまがい見る雲も桜のきにかかる頃

落花 本名 林 萬樹多 同人

よしの山王てふ花をふきちら今もあだなす北の朝風

雲雀 春閑亭花の賦風 同人

揚ひばり博士めかして武蔵野の天文台の上にさえつる

藤 本名 有田 右七 同人

春もはやすゑのまつ山詠むれば夏の越んとさける藤浪

山里花 山中舎 屋戸

山里ははなをおそえる人を見て咎め顔なる犬さくらかな

雨後花 本名 松村 伊助 蕭間居 紀廣樹

記念なる夕部の雨の疾はれてあしたの雲とみよし野の山

春駒 本名 柳田 倫美 想古堂 一樂

細手をばはなれて走る春駒の足をとめたる野辺の若草

製糸場 本名 村上 與介 田中 実

夜を昼につぎて糸とるわざ見れば

世にも開けて行は時の間 垣人 加藤 儀平

月のまゆ雪の言への女乙子は

とれるかいこのいとも美はし

江南製糸社長岡田君の遷歴の寿を祝ひ侍りて

澤村 桑坪

くり返す輪ひ長門の糸殺に

なをくりかへし花咲かせばや

チ、伊藤博文等の狂歌

沖津にて汽車の故障にあひし時

博 文

蒸汽車は何をするかのしら浪の

浜辺に我をおきつまたせつ

○ 品川弥二郎

那須原の狐は化けて苗代の

案山子となりし御代ぞ芽出度き

○ 同人

傘の松の小かげにやどりして

ころ涼しき夏の夜の月

杉 聴雨 狂歌

内藤清兵衛を偲びて

中の倉帰る馬子等にこと問へば

狂歌よむ人今は内藤

坂 韓峯 狂歌

山本勉弥先生の古稀を言祝ぎて

山もとの苔むす庵の白菊は

霜にたわまず弁やうるはし

第四篇 ペルリ浦賀来航当時の狂詩

及び風俗歌

イ、異国人渡来狂詩

此頃異船来近海、傳言乗込八百人、
大名發レ藏繕三甲冑、旗本受レ質磨二刀槍、
出来合刀難レ切レ骨、注文具足増三素肌、
芝居寂來鑄師、倭吉原客少鎧店盛、
樂枯恰似月與鼈、偏是異船御蔭様、
人集夜發大鳥銃、偏賣板行蒸氣船、
細川干堀評判宜、東子通人仰天甚、
俄習三炮術亦劍術、見三掛盜賊三莫索繩。

ロ、ペルリ浦賀来航当時の諷俗歌

まばくれ武士

ヤンレ騒動出来、抑も世上の、噂を聞くに、先年已来、唐人騒ぎで
交易、其時次等に、ぬらりくらりの返事をする故、いよづに乘
り、蒸気船とは、茶にした亜墨利加、呑れた阿部さん、こまつた戸田
さん、浦賀の御台場、御手伝なりとは、初手から言ったに、お為お急
きと、勘定奉行は、自分御勝手、諸人の不勝手、少しもかまはず、上
納金をば取るのとらぬと、やっさもつさを、いったあげくに、御免と

第五篇 都風流トコトシヤレ節

品川 彌二郎

○一天万乗のみかどに手向ひするやつを、

出かける、きゑんは出さぬの、酒々んはならぬの、なんのかのとて、
むりまで言出し、のつべらぼんの、大筒さわざで、玉がないとは、玉
げた嘶した、時に書翰は、どふしたわけだよ、チンパンカンパン、御
評議まぢく、和解、風情が、愚なりと思つて、一見したとて、ど
ふなるもんだよ、文武、と、今更さわけど、蜂にちんぼを、さ、れ
た同前、いたいの言はれず、かい、処に、と、いた手当り、御金が第
一、ヤレ、伊勢さん、どうしたもんだよ、しかりちらした、御隠居
なんぞを、引ずり出しても、まい手があるかい、外に御人がいくらも
あるふに、江川ごときの、上書を取上げ、のどつくびなる浦賀にかま
わず、鼻の先なる品川当りに、生海鼠のやうなる、人れ御台場、一つ
や二つ、こしらへたりとて、どふなるもんだよ、地のりは人の、和す
るにしかず、孔子のおじいも、いったでないかへ、まして甲府に、御
開など、は、言語同断、もったいない、たしなめ文句も、やっ
らよかるに越中ふどしの、古切などを、ひねくりさがして、こわも
て文句じゃ、今の浮世は、なか、いかねい、けんでおさえて、徳で
なすけよ、献金なんぞは、公儀次第で、どふでもなる事、徳は元なり
時は末也、己、が、勝手我ま、さらりとやめにし、五常を守りて
其身、の、行いた、しく、忠を尽せば、元より尊き、日本は神国、
亜墨利加おろしやが、歯が立もんかよ、待つと吹そえ神風々々。

トコトナヤレトナヤレナ。
○ねらひはづさずどん打出す薩長士

トコトナヤレトナヤレナ。
○宮さま宮さまお馬の前にひら／＼するのはなんじやいな、

トコトナヤレトナヤレナ。
○ありや朝敵征伐せよとの錦の御旗じやしらんか、

○伐見鳥羽淀橋本葛葉のたたかひは、

○薩士長しの合ふたる手ぎわじやないかいな、

○おとに聞えし関東さむらひどつちやへにげたと問ふたれば、

○城もきかひも捨ててあづまへにげたげな、

○国を取るのも人を殺すも誰も本意じやないけれど、

○わしらがところのお国へ手向ひする故に、

○雨の降るよなてつぽの玉のくる中に、命も惜まずさきがけるのも
みんなお主のためゆへじや、

第六篇 今様節

高杉 晋作等

高杉 晋作

討死なせしまずらをの魂のゆくえをたづぬれば

小倉の城を落しつづつ我國広くなりけり

杉山 松助

世は浮雲の重なりて月の影さへ見え分かず

驢に渡る一声は血にや鳴くらむ時鳥

実戸 真徴

濁ることなき鴨川の水を大江にひき入れて

流れの末もおもしろく恵みにひたせ四方の海

第七篇 久坂玄瑞

御橋 武士

文久二年三月 久坂玄瑞戯作

一とや 卑き身なれど武士は皇御軍の楯じやな、これ楯じやな

二とや 富士の御山は崩るとも心岩金砕させやせぬ、これ砕きやせぬ

三とや 御馬の口を取直し錦の御旗ひらめかせ、これひらめかせ

四とや 世のよし悪は兎も角も誠の道を踏むがよい、踏むがよい

五とや 生くも死ぬにも大君の勅のままに随はん、なにそむくべき

六とや 無理なことではないかいな生て死ぬるを嫌ふとも、これ嫌ふとも

七とや なんでも死ぬる程なればたぶれ奴原打倒せ、これ打倒せ
八とや 八咫の鳥も皇の御軍の先をするじやもの、なにをとるべき
九とや 今夜も今も知れぬ身ぞ早く功をたてよかし、これおくれるな
十とや 遠の神代の国なりに取て返せよ御楯武士、これ御楯武士

第八篇 俗謡

イ、俗謡ヨイシヨコシヨ節

ところ嫌はずはびこる葵今に刈りとり菊畑 高杉 晋作

三千世界の鳥を殺し主と朝寐がして見たい 高杉 晋作

しのび男の手拭かりて月にさせたい頬冠 木戸 孝允

真の暗夜に桜をけつり赤き心を墨で書く 品川弥二郎

磨き上げたる剣の光雪か氷かしの関 作者 不詳

二天作草露盤やめて敵を二つに市勇隊 同

膺徴隊とて見下げてくれなもとの天下も根は百姓 同

波の上でもおじやるならおじやれ船にや櫓もある種もある 同

あたまいが栗鉄べんついで子供おそるる金剛隊 同

国に仇なす猪武者をねらひそらすな狼撃隊 同

敵は白河夜の間に越えた漏らせ一声杜鵑 同

梅とかほりて桜とちりやれわたしいやだよ柳武士 同

麦の黒穂の先鋒隊の奴は鉾を揃へて出たばかり 同

ロ、俗謡

高杉 晋作

さくら炭いけた炬燵にうたたねすれば

夢は芳野の花盛り

久坂 玄瑞

龍田川竿で渡れば紅葉が散るし

渡らにや聞かれ鹿の声

人は武士気概は高山彦九郎京都三条の橋の上

遙に皇居を伏し拝み落つる涙は加茂の水

ハ、よしこの(都々逸)

辛末の春難波に遊びて歌妓などあまたともないて舟にて川さき

辺柳みる折よしこの二首 大賀 大眉

あだな色なる安治川柳

あじなことから深くなる

見てもかはゆき柳の枝を

それたつばめの気がしれぬ

明治十六年元旦 諸友に示す 同 人

的のはづれた胸算用も

儘よ鉄砲の玉の春

殉難志士二十五年祭 品川弥二郎

筆の跡見りや涙が先に

たつや身にしむ秋の風

二十五年の月雪花を

恋びくらしした身のつらさ

明治四十四年陸軍記念日

勝つも負るもこの沙河一つ

奉天かけたか郭公

蘭

かほりゆかしく域もしみな

清き心の蘭の花

二、鴨 緑 江 節

山 県 伊 三 郎

茶臼山、吉見の城跡たづねんと。各むすびを腰にさげ、朝露ふんで登る坂。さてもけはしきとりてかな。

(大正十三年八月菽茶臼山に登る)

夢さめて、見れば何ふに富士の山。三保の松原、横に見て、水中に映るは峰の雪、ホンニ又絵のような、朝景色。

(大正七年一月上京の途、車中作)

第九篇 村田清風大人銅像綱引歌

明倫尋常高等小学校 福湯兼二 作歌

菽 市 中村トキ 選曲

一、サアサ引きまじよ 引手が揃ふた
そろひ鉢巻きりりと締めて

ピント張り切る 大綱引けば

うれし清風さんの 雄姿が動く

二、音に聞えし 長州さんの

三十万石 お家の大事

堅く支へた 大黒柱

仰ぐ清風さんの 不滅の態度

三、しめた口元 あの光る眼は

ナマクラ武士の 度胸をためす

額に刻む 武勇の波も

凛々し清風さんの 襟姿

四、爺もたべます 麦飯馳走

三隅の里で 若君たちに

涙で説きし わが武士の道

ゆかし清風さんの その至誠こそ

五、史の都の 勤王館に

ドツカと坐る 文武の鎮め

松吹く風も 誉を語る

猛き清風さんの あの大精神を

あ と 書

昭和十三年四月二十六日、藤田鴻輔陸軍中將は菽市勤王館前庭(後の菽市中央公民館前庭)で清風翁銅像の除幕式を盛大に挙行せられたこの坐像は中將の親戚進藤義輔氏の特志出資により成ったもので、四

月中旬完成し、菽へ回送された。これが新川、吉田町を経て勤王館前まで、運搬された時に歌ったものである。歌の曲は天保頃謡はれていた江戸木遣音頭である。この歌は一時的のものであり、また銅像そのものも昭和十七年秋、大東亜戦争たけなはの際、多くの梵鐘銅器などと共に、応召取り除かれ、目下は人々から殆んど忘れられている。

九 華 記

第十篇 菽の川柳

イ、川柳中興の祖 井上劔花坊

井上劔花坊は日本柳壇復興の先駆者である。川柳今日の如き盛況を見るは、独り劔花坊師の力であるとは言いが、明治三十六年頃、日本の柳壇が大に動かんとした際、狂句を排撃して「川柳に還れ」と師が提唱したことは、新川柳の勃興に大に力があつたことは疑を容れぬ。

師は明治三年六月三日長藩の世臣云上吉兵衛光蕃の長男として菽町江向第三区(元菽市長安村正人氏現住地)に生まれ、幼名七郎、後幸一と改めた。秋剣と号し、川柳興隆の志を立つるや柳樽寺和尚劔花坊と名乗り、別に司馬僧正の覆面に隠れ硬軟の筆を揮い、更に別に紫望、龍泉の雅号を以て俸壇にも活躍した。昭和九年鎌倉建長寺に仮寓中病に罹り、九月十一日歿、年六十五。著書に次のものがある。新川柳六千句、川柳を作る人に、江戸時代の川柳、古川柳真髓、習作二十年、大正川柳句集。

明治、大正、昭和三代の作例数句を示す。

猫の皮
金無
ある音とさせ



井上 劔花坊

劔花坊筆跡

明治時代
星すみれ天の壮嚴地の美麗
死神が離れて二人腹がへり
猫の皮金の無くなる音をさせ
呉れさうなものとはけちな憤り
大正時代
いっばいによるこびを吸ふ朝の窓
いざ金という特別な人になり

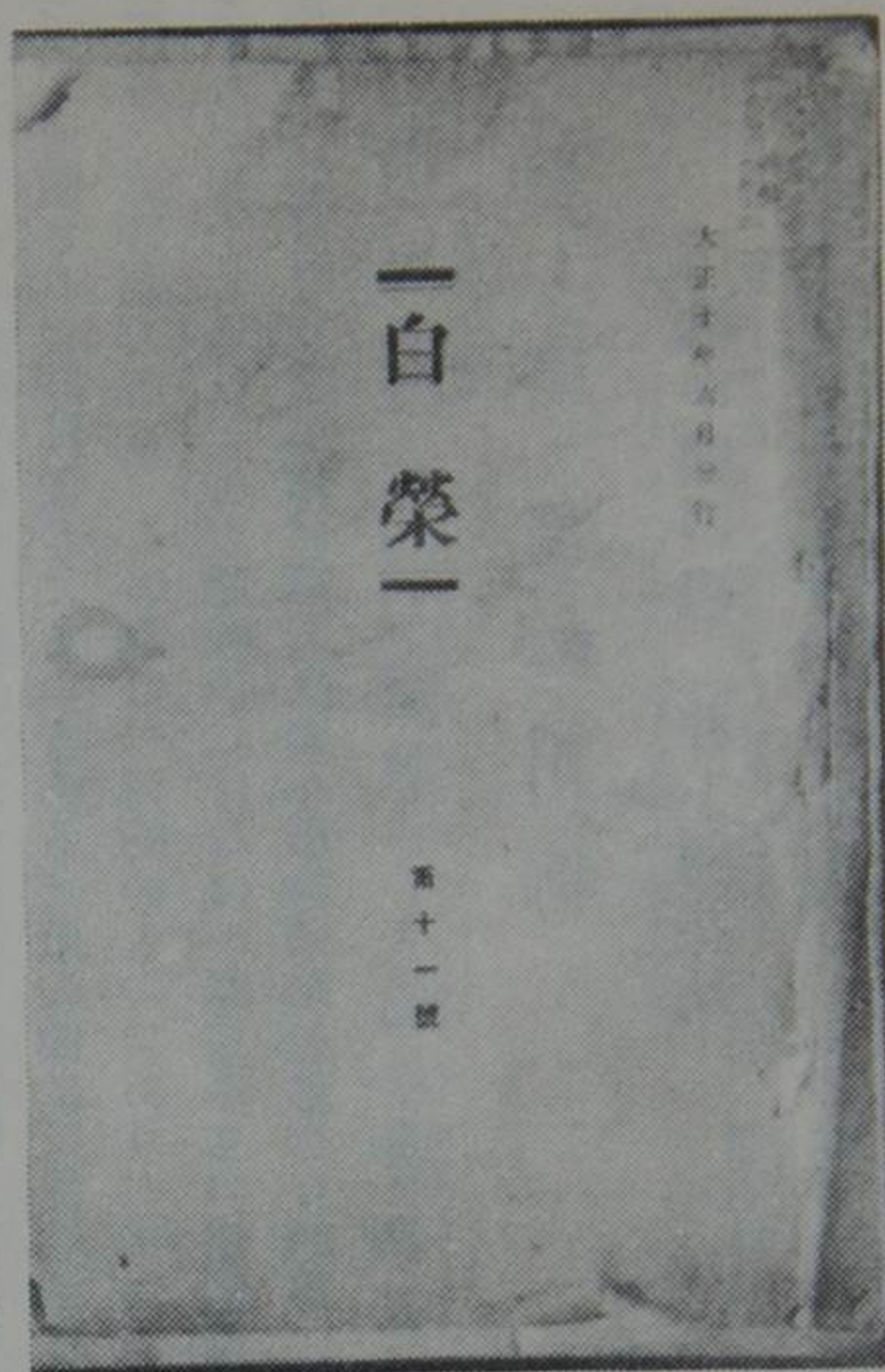
どつしりと坐る一万二千尺
咳一つ聞えぬ中を天皇旗

昭和時代

草むらの圃に生まれて灯に死ぬる
見ぬふりで我方を見る人を見る
乗鞍のたて髪ふるひ走る雲
悪句抜く耻より佳句を逸す悔
政治屋に内閣といふオモチヤ箱

ロ、萩の川柳 会期前会員とその作例

井上剣花坊先生の呼吸がかかった萩の川柳会は前期と後期に分ける
ことが出来る。



萩の川柳会機関誌「白栄」表紙

巴堂 陶器商
算盤を枕にしてる夜の雨
白扇に記念と書かす講演後

楽仙 郡吏

マント着たままで寄り添ふ長火鉢
技手のいふ様には稲が作られず

権太 教育家、町吏

名木に札打って居る弥宜の顔
背景に川と柳の野外劇

柳仙 医師

よい返事する前一寸下をむき
大地主肩身を狭く金を持ち

江の人 神官

木の頭その大話の物足らず
稲びかり浜辺の圃を凄がらせ

烏枕木 医師

木の膚に触れて冷い秋を知り
県会のたんび芸者の名を覚え

円江 細工職

どれも皆柳のやうな花火なり
明日死なふとはどの顔も思ふまい

玉声 会社員

稲こぎへふんばる度に乳がゆれ
満員車マントの裾を人が敷き

藤屋

柴田 修亮

藤本 坎蛙

山本 勉弥

中津江延彦

久我 岩雄

神野 晋造

福田 栄一

萩 東 教育家

新道路三角の地に草が生
婦人会置いて出た子が気にかかり

山内 清次

長 峽 新聞記者、菓種商

恋愛の墳墓へ行くを飾り立て
村を出てしまへば天下晴れてなり

杉山 高介

久米仙 科学者

坐布団が一つ足らいで恐縮し
成金はあまり下情に通じ過ぎ

黒川衆次郎

愚項坊 教育家

夕立に洗ひ出された月が笑み
新婦朝下駄の音にもなつかしみ

吉岡 恒郷

枯 萩 医師

旧友に先づ子の数をたづねらば
年始状オウさう／＼と思ひ出し

長浜 友雄

平 太 医師

下戸知らぬ味夜半の水朝の酒
大地打つ槌でござるとつきつける

芳野 愛介

円 玉 医師

電話口小声になって笑はれる
自多楽坊 新聞記者

玉木 亟輔

自多楽坊 新聞記者

地下室があやしい顔の本部なり
輪に吹いたあとがそろ／＼本音なり

井上 茂

河野 通毅

藤屋巴堂夫人

吉田 理

竹内 八郎

阿武 道輔

津田

比律軒

大丈夫々々々とて落選し
流連の起きんとすれば二日酔

九郎坊

わつといふ迄刺客と気がつかず

秀吉

教育家
長襦袢風なびかせて椅子に寄り
あくびしてまた寐むりこむ独り者

碧又は丸三 郡吏

恋人とわざとおくれる一列車
友禪の袂へ桜散りかかり

鮑羅

声にして泣かねば人が承知せず
夏まけの女返事をうるさがり

四十雀

一をさき十を女房悟るなり
あくせくと子をこしらへるだけの聲

呑風

旅の耻同じ浴衣で涼んでる

色外

小荷物を序に運ぶ娼車
浄瑠璃を見上げて土間で首を振り

天連
一べんは他人の飯と阿爺言ひ

三好 照夫

桂

松永

一様に一割引の年の暮

秋日和十萬徳土が透いて見え

村夫

禪のあとだけ白い渡し守
水道へ裸が続く裏長屋

苦楽

ようございませと云ったがむづかしい
鏡台によつてしばらく梳けつり

要四郎

地の上を化粧で刷いた今朝の霜

正路

笑はせて地口いよよ真面目なり
来た時はこれでもと女房口をさき

伊太郎

古女房日にく髪を新にし
飲めぬ奴煙ばかりを吹いている

玉畝

大狸月下に座して腹鼓
地藏尊月がよくても仰向かず

一徳

前に出て発言をする半可通
滝裾で水をひさぐ長門峽

青柳

出て行けと叱って胸で泣いている

飲ませると聞いて俄かに槌の音

芳里

前歯をばわざ／＼折って金を捨て
叩かれて泣いても慕ふ母のあと

琴石

戯談といつておれない板挟み
許嫁時代を語る老夫婦

新坊

柱時計惨劇思ひ出し
お茶をひく晩は扇もつかはれず

旭坊

這入るには這入ったが用言ひ洩り
一笑

江の女

不甲斐なさ身も世も呪ひ果てない気
送られた母の心の一包み

酒国民

天然の美へ資本主義鑿を入れ
遷りゆく世紀を越えて不二の雪

素山

花嫁の時だけ惚れた女房なり

山口屋

花嫁の時だけ惚れた女房なり

斬空

大雪を降らして平気な青い空

光々燈

うぬぼれの美をうつし出す鏡です
雪の肌うす桃色の血が通ひ

水月 鍼灸家

正体をしばらく包む化の皮
消し炭は即ち家政の一ヶ条

木仙

なま喚い鍋へ僧正のぞかれる
秀女

野菊女

コスモスが咲き出すと又思ふ事
七転び八起といふに我慢をし

新婚の気分いつまで明い家

ハ、萩川柳会後期会員と其作例

花蝶

入営を送る爺は跛なり
飾っても心の底の底が見え

八十八 公吏

投げかけしテープに通ふ血と涙
玉章をヒッシと抱いて目をつむり

尾崎

虹洋

闇に咲く赤い花なら闇に生きろ
嘲笑のうちに所信の闊歩なり

谷

仁華紗

後素堂、社員
美名にかくれて侵略の魔の手
なやましく四十余年を孤独にて

渡辺

伊佐奈

神官
雪除けの底にみじめなパンの切れ
網膜の底にドクロの輪廓美

中津 江功

みつ女

捨鉢の度胸女と思はれず
どん底にハッキリ刻む貧と飢

天 郎

地の底の虫にも虫の持つ心
行商の戻った家に妻は留守

佐野

とよね

婆羅門の甕の底から燃える愛
正月にフイと賀状の恋心

桂

湯 華

見送りに目の醒めぬ子を揺り起し
見送りの刹那用意の空涙

七日堂

正直にいへば食へないからの事
哀願悲願しまひには勝手にしろ

夜泣石 銀行員

火取虫真正面の命なり
束縛の中へ泣いてる高い窓

中山

跋

庶民、庶民性、庶民文学

詩歌、文学、美術、音楽などの文化的芸術的作品の一切が、もっとたやすく、大衆に触れ、愛され、鑑賞される時世ともなれば、我が民族も人類のすべても急速に幸福を増し、明るい社会国家となるだろう、とは誰も念願するところである。しかしこれは作者が、純粹な良心的な実作態度であり、大衆もまた自ら強い批判力を持つという、条件の下にある。私のいうこの大衆とは、必ずしも当たらないが、この書の標題となっている庶民のことである。私達庶民は何かの生業を持つていて、一般庶民と交渉深く、社会事情の激動の中に必死の生活を続けている。極端にいえば、血みどろ汗まみれで、命をつないでいるものである。だから現実的には、文学鑑賞などの余裕はないともいえる。しかし、それでも現在の読書事情は急激となって増大し、映画音楽なども気狂いじみた盛況である。この実状は何を意味するのだろうか、その理論的解説をする場合でもなく、又、私の任でもない。唯このような結果的現象は、よくも悪しくも自然的必然的なものである。だから庶民と芸術との繋りは、極めて深切なものであるといえる。これは過去においてもそうであった。且つ文化的機関の稚拙な時代にあっては、庶民自から創造して、隣人郷土の間で娛んだ。その秀れたもの、特殊なものが、現代にまで伝承されて、今日、貴重な文化財となり、風土的史財となっている。今なお唄い伝えられる古民謡

は、文学的作品として、又、音楽的作品として、民族祖先への限りない郷愁を覚えさせている。素朴な建物、彫刻類の遺された物また然り。中には信仰の対象として猶々未来へ存続される勢の物さえある。

秀抜の技能を持った、いわゆる天才的人物の作品は、その芳名と共に己に古典の座に置かれてある。これらの作品が、庶民の文化的教養に深甚な美的感化を及ぼしたことはいうまでもない。ところがこれ等の古典的作品の影響にも増して、地味ではあるが、広く厚く浸透して、今日に及んでいるのは、意外にも無名作家、即ち庶民作家の作品ではあるまいか、ここにその実例を上げることが出来るが、それはこの書を読まれる。諸賢方においても容易に察しられることと思う。だから世々代々の我等の祖先なる庶民達は、誰も文学を欲し、芸術に親しんだ。その鑑賞の実力も持ち、自然自から創作する欲も覚えたわけである。その証として見るべきは、短歌、俳句、川柳、狂歌などの短詩型文学が、我が国独特の形で、万葉集以来、現代に至るまで、旺盛に栄えていることである。それを庶民的な唄いものに使化したのが、様々の小唄類である。この極小型の文学を生んだのは、庶民の自然の希念欲望からであろう。如何に我が民族の庶民達が、芸術を愛好したかが察しられ、ほほ笑まれるではないか。

ところで、悠々古典の座に昇華し得た、天才的作品は、当然厳しく保護されるが、忘れ去られるには余りに惜しい。一般的作品はどうなっているのか。寧ろ古典的作品より遙に親しまれ共感されて、静かに深く教化の役を果たした。地味ではあるが、極めて直接的だった。これらの作品は、朝夕の雲影の去来の如く現われ、且つ空しく消えてしまふ。その何万分の一の作品は遺るが、作者の名は概ね喪はれてしま

うというのが普通である。

今一つ別の角度へ目を移してみたい。私は前から、松陰先生を神格、偉人像から下ろして、一庶民吉田寅次郎に對い合ってみてみたいと思つてゐる。「松陰先生はこれが全部である庶民も神格もない」といわれれば、それまでだが、必ずしもそうでないのではないか。私が学校に勤めていた頃、備付の書棚から「松陰遺文」をとつて見るうちに先生が門弟達の情事感を叙べておられる一文に出会つて、思わず明るい微笑が湧いたことがある。「松陰は稀に見る謹嚴な人物だったが、弟子達は揃いも揃つて、道楽者ばかりだった。」という、徳富蘇峰の言葉も忘れられない。戦後の社会情勢はやや不礼者であつて、週刊誌などは、歴史的人物の秘事を容赦なく際限なく摘発している。それによると軍神乃木希典なども青年将校時代は、堂々花柳の巷にも往来したらしい。時代を超え思想を超えて、偉大なる松陰や乃木ではあるが、何故、歲月経過と共にいよいよ庶民の間に人気があるのか。過大に理想化されても、少しも異存ない業績を遺した巨星であるとともに又、庶民としても、極めて親しみ深い素質を持った人柄だったのであるまいか、その故にこそ、この両者は超巨星だといえるのではあるまいか。

更に今一つの角度へ移りたい。この書中の作者達の中には歴史的専門作者もあるが、大部分は庶民作者、又は高名の歴史的人物の、余技としての作品である。この場合の余技としての芸術的作品とは、その作者が一庶民の座に還つての、趣味作と見たい。これがまた実に尊重すべきものである。或る有名な現代歌論家が「元師山県有明は頂けないが、『仇守る：』の一首には、無条件で頭を下げる」といった。これ

この書中の作品と作者は、右に述べたような必然的動向に寄与する、貴重な資料ばかりである。この書に對して、今更の如く思われることは人暦や芭蕉のような巨星を研めることは却つて易く、無名の庶民文学を整理するは実に至難であるということである。実に困難で厄介なことではあるが、上述の如く極めて大事なことで、誰か是非敢行しなければならぬ仕事である。又、一面その重大性を別としても滅び易く消え易い性質のものであつて、しかもかけがえのない、永年に亘つての郷党隣人が親和した結晶の累積である。慕情豊かな足跡である。必ず子々孫々へ伝え遺すべきである。

この時わが郷土は、情熱の学究、山本勉彌先生を得ることができた。何という至幸なことであろう。已に幾多の埋もれかけた文化財を次々集成して、明るみへ出して下さつた。そして御高齡にかかわらず、弥々志操御堅固、今回この至難中の至難なる御著述を完稿なさつた。真に感激の極みで、又、慶祝に堪えない。なお且つ有難いことは、先生は純粹の学究的態度で、極めて厳しく対象を処理なさることである。何時の代、何処の郷土研究者も郷土宣伝的感情に走り、又、

は純文芸作品として、一際秀技なためである。元勲伊藤博文の「豪氣堂々」の一首が、如何に当時の青年の志気を昂揚したか、これは多分に庶民的情熱の表白だからである。この書中、杉藤雨翁の狂歌詠に触れて、思わず私の腹の隅々まで清風が透つた。高齡、且つ劇職にあつて、悠々倦まざる翁には、本来、この庶民的余裕があつたのだ。有難いことである。

私の一瞥見であるが、政治にしても文化活動にしても対象が庶民であるとき、善政であり、純粹の芸術であると信ずる。抽象的で舌足らずで申訳ないが、庶民即ち大衆が一切の対象でなければならぬということになる。しかし現今、時に行われる「世論を聴く」ということが、即ち庶民の声を聴くということにはならない。訴えも意志表示の場も与えられず、否応なしに大勢に乗せられて流れ、時には犠牲にもなる、という大衆の中の大部分に當る者で、世論層の又その下層が庶民である。重大の座に在る政治家、実業家、学究者の諸賢も所信を實行に移す場合、必ずこの庶民層に還つて、その身になつて見て、今一応深考して欲しいもの。これらの指導層の諸賢が、一応庶民に還るといふことは、心を幼くして、慈母の膝下に帰るべきもの、即ち庶民の実態を正視し、皮膚に触ることである。それからの実行でないと空転に過ぎない徒勞に終るか、時には有害となる場合さえ生じる。かくのごとく、何の角度より見ても、庶民と庶民性は大切なものであると思ふ。

私には文学界のことしか分らない。それも極めて稀薄にであるが、それによつて見ると、今、文学、詩歌の面は、大衆へ大衆へと向つてゐるようである。即ち読者を庶民に求める庶民のための文学でありた

自己満足名譽欲の弊に陥ちて誇張となり、修飾が加わり、甚しきは脚色さえ為されるといふ傾向になり勝ちである。先生はこの点を冷酷な程重視して、事に當られる峻厳さ。だから一見、意外に地味であるが、安心して後代に伝えたい、盤石の信頼感に打たれる。

私はこういうことのために文章を書くことは、苦手でもあり、又好まないものであるが、今回、先生の御一顧を頂いて、何の躊躇なく進んでこの小文をまとめたのも実は先生のこの清潔至純なる御志向に感激したためである。(昭和三十五年二月十一日 小島経彦述)

本書は山本勉彌先生の遺著であり、また先生畢生の事業たる「萩文化叢書」最後の出版になるであろう。「山本勉彌略年譜」を「萩回顧録」より採つて、増補再録するとともにその葬儀に際して故人の靈に捧げられた吊辞のうちより一を掲げて故人を偲ぶことにした。数多くの吊辞の総てを採ることは紙数の関係上でできなかった。ここには故人の親友で、その著作によく協力せられた河野通毅氏が故人の靈前で語られた告別の辞を記載した。なお氏のほかに萩市長菊屋嘉十郎、萩医師会長都志見善親、山口県立萩高等学校同窓会和田渉、山口県立萩高等学校校長上野康貴の諸氏から吊辞が捧げられたことを附記する。

(編者記)

弔 辞

九華堂主人山本勉彌先生は今や亡き人となられました。先生の御逝去の由を聞いた時には私は嘘ではないかと思うほど驚いたのでありま

す。青天の霹靂とはこのことでありませぬ。萩における文化面は非常の損失ではないでしょうか。地方史学界の明星落ちたという感じがいたします。それと共に先生の過去における経歴や功績などがそれからそれと考えられてくるのであります。

私が先生を初めて知ったのは萩中学校で校医としての先生でありました。実に大正九年のことでありませぬ。先生はこのごろ熱心な日蓮主義の研究家でありました。萩護国少年団を組織したり、萩中生徒を呼びかけて雑誌「自警」を発行したり、或は萩自強会を結成したりなどせられました。先生の萩における社会的な活動はこの頃がスタートではなかつたでしょうか。それならば私は先生の最も古い友人のうちの一人であるといつてもよいかも知れませぬ。

大正十三年頃から萩における民衆運動の最大なる電燈争議がおこりました。その中心指導者は先生でありました。萩においてかかる争議が成功裡に終つたことは奇蹟とでもいうことでした。私は一昨年山口県から山口県会史の編纂を頼まれて山口県議会の速記録等を調査してこの事件の真相を知るに及び実にこの事件は全国的電気事業界の大問題であつたことを知りました。先生の指導ぶりは大衆政治家としてはまことに徹底して機宜に適し、よく人心の機微を促え得た卓越せる技倆を揮われたといつてよいのであります。その後先生が県会議員として県政に参画せられることになりましたのはまことに自然の結果といわねばなりません。「満鮮百話」という小冊子ができたのはこの時の記念であります。この頃先生は萩仏教研究会を創設して、関誌「法鼓」を発行せられました。それは十一年間も継続した月刊雑誌でありました。暁鳥敏先生や海野鏡円老師を招聘したのもこの頃でありませぬ。

集めて出版せられます時、私は先生のお手伝をしました。その時先生は申されました「君と僕とはお互にはや老齢である。お互に今の中に紙の碑文や墓誌を残しておかなくては」とお互に相顧みて慨然として大息せられました。今や先生の残された著述は先生の碑文となり墓誌となりました。感慨無量のものがあります。先生在夫の霊は私のつきせぬ感慨を何とお聞きとなりますや、以上を以つて先生への手向の御祠といたします。

昭和三十三年五月三十一日

知友 河野通毅

山本勉彌略年譜

- 一、明治十八年三月十二日山本光三長男として和歌山市小野町三丁目二六番地に生る。
- 一、父光三は藩士林良八（旧名半之進）の次男として安政元年八月二十三日萩前小畑に生れ、明治四年三月当時下上野に居宅ありし藩士山本小三（旧名清右衛門）の養子となる。
- 一、光三は明倫校学頭小倉遜齋に学び、明治二年十六歳にして山口藩第四大隊に編入され、十八歳上京、御親兵第六大隊に編入さる。其後郷土の先輩品川、野村などの高官に引立られ、紙幣局、山林局、地租改正事務局等を転勤、盛岡、仙台、新潟より南は鹿児島、琉球にまで足跡を印し、明治十七年和歌山県収税属に任官、漸次昇進して判任官四級俸を給せらる。明治二十五年五月奈良県収税属となり、約二十五年五条町に転住す。五条より帰和せる後紀州銀行の創立に尽力し、同行の支配人となる。同行が四十三銀行と合併するや、

す。仏教研究会を発展的解消して新に萩文化連盟を組織して月刊誌「萩文化」を発行し、これも六十年間発行を継続しました。

大東亜戦争の終わるころから先生は萩文化叢書の著述と発行とにその余生の全部を捧げられました。叢書は十余部に及びました。先生の地方史研究は実に徹底的で徹に入り細かにわたり倦むことを知らず精魂の全部を打込まれるのであります。私は郡司家の研究を始めとして萩城の瓦や考古学上の出土品の研究等親しく見まして徹底ぶりには驚いたのであります。学校や図書館等の組織を持たぬ先生特が立特行かく精細の研究をせられることは容易ではありません。先生はよくその困難を克服せられたのであります。況んや経済的には誰からも援助をうけず不平をいわず、これほどの事業を完成せられたのは尊敬の念に打たれずにはおられません。「かくれたるより顕わるるなし」とか申しますが、先生の努力はやがて萩市においてもそのままではおきませんでした。昭和二十一年、同二十七年の二回にわたり萩市は先生を文化功労者として表彰いたしました。二十七年には山口県もまた先生を選奨いたしました。

先生はそのほか古泉の研究家としても全国的に有名であります。和歌、俳句、川柳等にいたるまで行くとして可なわざるなしという文化人でありました。私は唯今政治家として医家としての先生の御功績には触れませんでした。これ等の方面でも先生が卓越せる識見と非凡なる技倆を有していられたことは勿論であります。

行く水の流れは絶えずしてもとの水にあらずとか阿武川の水は長に流れましようが、しかもそれはもとの水ではなくて且、又先生の面影は遂に見ることはできません。先生が萩の石碑やお寺の梵鐘の銘文を

四十三銀行新通支店長となり、七十三歳に及ぶ。昭和四年一月二十五日歿、享年七十六。

一、母たか。齊藤平八の次女として安政六年十二月二日萩上野に生れ、明治十一年十月十五日山本家へ入籍。明治二十一年八月十日歿、享年三十。

一、継母みよ。齊藤平八長女、安政四年五月七日生、明治二十二年三月阿武郡山田村内藤直亮養女として山本家へ入籍。昭和四年四月十九日歿、享年七十四。

一、姉しげ、明治十四年五月生、二十二歳の時森青胤に嫁し、二男二女あり、昭和二十二年三月歿、享年六十九。

一、明治二十七年三月和歌山市湊南小学校卒業。

一、明治三十四年三月和歌山県立第一中学校卒業。

一、明治三十七年三月第七高等学校造士館卒業。（第一回生）

一、明治四十一年十二月京都帝国大学福岡医科大学卒業。

一、明治四十三年九月萩吉田町養春医院内科部長就職。

一、明治四十三年十二月萩唐樋町に開業。大正八年九月萩江向に転居。

一、妻たき、大阪府堺市近藤喜恵門二女、明治二十三年十月二十一日生、明治四十四年五月入籍。

一、明治四十五年四月より大正十二年四月まで萩町町医就任。

一、大正元年十二月より大正九年四月まで椿西小学校校医就任。

一、大正七年四月山口県保健衛生調査委員を命ぜらる。

一、大正八年七月同志と共に萩自強会を作り、同会の事務を司どる。

一、大正八年八月同志と共に妙蓮寺住職紀野俊耀師を援けて萩護国少

年団を設立す。

一、大正九年四月より昭和十五年四月まで 山口県立萩中学校校医就任。

一、大正九年五月萩中生に呼びかけて自警会を起し、雑誌「自警」を発刊す。

一、大正九年七月虎列刺流行に際し、萩警察署勤務防疫員を命ぜらる。

一、大正十一年一月より大正十五年三月まで山口県立萩高等女学校校医就任。

一、大正十三年三月より大正十五年五月まで美祿線鉄道医に就任。

一、大正十三年十二月萩電争議の渦中に投ず。

一、大正十五年三月阿武郡学校医会創設時より昭和七年七月まで同会長就任。

一、大正十五年四月萩町町会議員に当選。

一、昭和二年七月同志と共に萩仏教研究会を創設、昭和三年三月より昭和十三年五月まで機関誌「法鼓」を毎月発刊す。

一、昭和三年七月萩町町会議員に再選。昭和六年四月より昭和七年七月まで阿武郡医師会長就任。

一、昭和六年九月林萩町長排撃運動に関係す。

一、昭和六年十月山口県会議員当選。

一、昭和七年七月より昭和十一年二月まで萩市医師会長就任。

一、満蒙鮮の旅を終へ、昭和八年九月「満蒙百話」を刊行す。

一、昭和十年七月萩上水道鉄管問題起り、同問題の渦中に投ず。

一、昭和十年十二月河野通毅氏との共著「防長に於ける郡司一族の業

績」を刊行す。

一、昭和十三年四月同志と共に萩文化研究会を起し、その翌月より昭和十九年六月に至るまで機関誌「萩文化」を毎月発刊す。

一、昭和十六年九月萩文化聯盟組織せらるるや、副会長に推薦せらる。

一、昭和十八年十一月萩文化聯盟会長に推挙せらる。

一、昭和十九年一月萩文化聯盟は萩文化報国会と改称、依然その会長を勤む。

一、昭和二十年十二月萩文化協会設立せらるるや、同会顧問に推薦せらる。

一、昭和二十一年二月萩市より文化功労者として表彰せらる。

一、昭和二十四年十二月同志と共に設立したる萩史蹟保彰会の顧問となる。

一、昭和二十五年九月萩文化叢書第一巻として「萩の陶磁器」を刊行す。

一、昭和二十五年十二月田中市郎氏の遺著を集め、「珍魚の蒼」と題して刊行す。

一、昭和二十五年十二月「萩電争議実録」を刊行す。

一、昭和二十六年十月「萩の瓦」を刊行す。

一、昭和二十六年十二月「萩附近の史実」を刊行す。

一、昭和二十七年五月萩市公民館郷土資料蒐集委員に選任せらる。

一、昭和二十七年七月萩市制二十周年記念式において文化功労者として重ねて萩市より表彰せらる。

一、昭和二十七年十一月山口県より文化功労者として選奨せらる。

あとがき

田中助一

故山本勉彌先生は、昭和三十四年九月「萩回顧録」第二附録「劔」を刊行して知友に配布せられた時「尚萩文化叢書第十一巻は「萩の漢詩人及庶民文学」とでも題し、上梓すべく準備中であります。来春早々には物に致したいと念じています」と挨拶状に書いておられる通り、その準備をしておられたが、まだ少し不十分な箇所があったので、予定通りには上梓せられなかった。

三十五年五月二十二日（日曜日）午後、用事があって先生をおたずねしたところ、頗る上気嫌で将来のことなどについても種々お話になり、私の意見により村上景介氏（萩市立指月中学校教諭、東京美術学校日本画科卒）に依頼せられた表紙もできたから、近く原稿を印刷所に渡したいと見せて下さった。しかるに思いがけなく四日後の二十六日早朝脳出血が起り、二十八日朝遂に永眠せられた。先生が平素主治医の兼田功博士や私の要望をお聞き下さって、無理をなさらなかったら、まだ寿命を保たれたのではないかと、返えず返えずも残念である。

その後御遺族より多くの郷土資料が萩市に寄贈せられたので、萩市では返礼として先生の心残りの原稿を出版することとなり、私もその原稿を見せていただいたが、それは先生が発病まで調べておられた通り、まだ不十分な箇所があって、増補する必要があるが、独力で作り

- 一、昭和二十八年五月「萩碑文鐘銘集」を刊行す。
- 一、昭和二十八年十月「萩俳諧史」を刊行す。
- 一、昭和二十九年十月「毛利藩貨幣」を刊行す。
- 一、昭和三十年十二月「大萩雑話」を刊行す。
- 一、昭和三十一年二月萩中央公民館運営審議会副委員長に選ばれる。
- 一、昭和三十三年三月「萩の歌人の歌人」を刊行す。
- 一、昭和三十三年三月二十一日山口県医師会より文化功労ある医人として表彰せらる。
- 一、昭和三十三年九月「萩回顧録」を刊行す。
- 一、昭和三十四年一月一日萩回顧録附録「こたま」を刊行す。
- 一、昭和三十四年一月萩市誌編纂委員会編輯顧問を委嘱さる。
- 一、昭和三十四年九月三日萩回顧録第二附録「劔」を刊行す。
- 一、昭和三十五年二月一日脳溢血に罹り約一月間臥床す。
- 一、昭和三十五年五月二十六日脳溢血再発す。
- 一、昭和三十五年五月二十八日午前七時五十分逝去す。享年七十五。
- 一、昭和三十五年五月三十一日、享徳寺に於いて葬儀執行す。改名「慈徳院杏林九華居士」遺骨は同寺墓地に埋葬す。

註 本年譜は「萩回顧録」末尾に所載のものに昭和三十四年一月一日以向の記事を補ったものである。 編者記

功成りて牡丹の花の散る如く、を心

追悼句 久保雲仙作

たいと考えておられた先生の御気持を尊重してそのままにした。

先生は和歌山中学校、第七高等学校造士館(第一回生)京都帝国大学福岡医科大学(第二回生)を卒業しておられるので、知友には各界の有名人が多い。それで私はいつか萩にこられるまでの回顧録と「萩回顧録」にあまり書いてない医家としてのことや、萩文化聯盟のことなどをお書きになることをおすめしたところ先生も賛成せられ「萩の漢詩人及庶民文学」がすんだらそうしようといっておられた。

先生が萩に来住せられたのは明治四十三年九月であるが、その時洋行しようかどうかと考えておられたそうである。もし先生が洋行せられたら、大学教授か大病院の院長になられたかもしれないが、父君の出身地である萩に心引かれ、多彩な生涯を遂に萩で終えられることとなったのである。

私は先生の業績を回顧して、同学同好の後輩として感謝に塊えないが、先生が「萩文化」の終刊に際し短冊に書いて下さった「芽生えせし萩の香のよしそしくも生ひたせてよ我に続き」という短歌にしたがって、少しでも先生のお心に叶うように微力をつくしたいと考えている。

萩文化叢書第十一巻

「萩庶民文学」

著者	故 山本 勉彌
装釘	村上 景介
口絵写真撮影	塩田 吉春
編集	田中 助一
同並びに校正	脇 英夫
同並びに校正	藤山いさの
印刷所	瞬報社写真印刷株式会社
発行所	萩市郷土博物館

山本勉彌編著

萩文化叢書目録

第一巻	萩の陶磁器	A5	八七頁	〒価	一四〇円
第二巻	珍魚の誉	A5	六二頁	〒価	七〇円
第三巻	萩の瓦	A5	七七頁	〒価	一〇〇円
第四巻	萩附近の史実	A5	一〇三頁	〒価	一〇〇円
第五巻	萩の碑文鐘銘集	A5	一二七頁	〒価	一四〇円
第六巻	萩俳諧史	A5	七四頁	〒価	一〇〇円
第七巻	毛利藩貨弊	A5	六二頁	〒価	一四〇円
第八巻	大萩雑話	A5	八七頁	〒価	一四〇円
第九巻	萩の歌人	A5	一一二頁	〒価	一四〇円
第十巻	萩回顧録	A5	九六頁	〒価	一四〇円

山本勉著 萩電争議実録

A5 七二頁 七〇円

山本勉共著 防長における郡司一族の業績 品切

A5 一〇二頁

以上萩文化叢書等は歴史の都萩市の歴史と郷土文化を知る上に最も信頼するに足る文献であります。頒布は次のとおり取扱っておりますので御申込下さい。

一、申込所

萩市江向四区

萩市郷土博物館

二、代金に送料を添え御注文のこと(一〇〇円以下郵券可)

TRC102078

910.2
▽74 34064

萩庶民文学

34064

返却期限票

- 最後にある日付があなたの返却期限です
- 遅れないように期限内に返しましょう

5. 6

8. 4

8. 15

4.-8

02

7

萩市立図書館



111071031